

先哲墨寶

乙

明治
41 12 28
内交

先哲墨寶

報徳講演會の京都に於て開催せらるゝや先哲の遺品展覽の事ありしか幸に諸家の贊襄を得秘藏の名品を出陳せられたり京都は固より先哲の遺品多けれどもかく一室に蒐輯ありしは稀なるへし一旦解散すれば更に集め難きを以て其優品を擇み撮影して寫眞帖となし世に廣むることゝなり文彦に之か編纂を委託せられたり

抑も今回の事は二宮尊徳翁の報徳主義に基せるを以て其流の物を集むべきなれど京都には其主義未だ開けず因て熟らく考るに先哲の執るところと翁の主義とは稍其跡を異にするか如きものあり先哲は道理

明治
41 12 25
内交

長明
82 8 11
内交

即ち形而上を重とし翁は事業即ち形而下を主とし外
観よりすれば自から別あるか如くなるも要するに皆
是れ聖人の道の一派にして唯其赴く途の殊なるのみ
にて其歸する所は固より同じく聖人の道の範圍の中
を出つへきにあらず此の如く看來れば獨尊徳主義に
限るへきにあらず斯道の爲めに力を盡し、先哲
の遺品を集むる事とし此展覽會をは開らく事となり
ぬ忽々の際固より完備なるを得さりしも大方の稱贊
を得しは且は愧ち且は喜ひし所なり但しその急速に
して遺漏の少からさりしは遺憾とする所なれば此寫
眞帖には更に其重なる人の遺品をも補充する事させ
しも猶未だ完備にいたらざるは免かれざる所なり

思ふに京都は文學の淵源にして三百年前より其盛を
極めたり慶長已來各種の學派勃興し陽明徂徠二派の
外は大抵京都に發源し四方に流布し眞に文學の淵源
たる稱に負かさりき
顧みて平安文教の基元を繹ぬるに遠く 桓武天皇
の聖旨に出たり 帝叡聖明達南都の宿弊に鑑み
人才の急要を認め延暦十三年平安京を造營し十月二
十二日長岡より遷都あるや皇居も未だ完備せざるに
先たち十一月七日に詔を下し主として大學を興隆し
給へり其詔文に古之王者教學爲先訓世垂風莫不由之
とあり此詔は恐しこかれと 今上天皇の教育勅語
と千載雙美とも頌奉るへきなり是より先き大學の設

ありしも未だ甚た振はさりしか此に及び資産を増し
其經濟を優にし以て教育の實を舉げしめ給へり貴冑
名族も之に倣ひて私學を興し其子弟を教育し文學蔚
然として起り人材彬々として輩出し以て王政の盛を
鳴らしたり其後數百年朝綱漸く振はす一旦衰微せし
か戰亂騷擾の間に當り僧侶か僅に文學を維持せし時
に於ても稀世の學僧其跡を絶たす文教の系統は能く
繼續せられたり故に慶元偃武奎光煥發するに及びて
は名儒碩學勃然として出て道を講し教を弘め師資相
承け四方に播揚し江戸といへども綏圉流の外は概ね
平安の支流たり慶長より元祿に至る百餘年間京都の
學者の盛んなりしは實に古今に絶したり

其最も著しきものを舉げんに儒家には林家父子朝山
素心松永昌三江村專齋木下順庵伊藤仁齋東涯父子兄
弟伊藤垣庵及錦里兄弟山崎闇齋熊澤蕃山仲村惕齋三
輪執齋角倉素庵並河兄弟三宅道乙雨森芳洲田中止邱
三宅石庵觀瀾栗山潛峰宇野兄弟皆川淇園村瀨栲亭岩
垣龍溪の流あり皇學には荷田春滿を主として今井似
閑富士谷成章御杖の如きあり心學には手島堵庵中澤
道二柴田鳩翁の徒あり博物には松岡恕庵小野蘭山山
本亡羊あり是皆平安の人なり惺窩先生は其采地播州
に生れしも公卿の裔なり石川丈山三宅亡羊那波活所
菅同玄堀正意松下見林三宅尙齋北村篤所稻生若水及
ひ近世の頼山陽の流の如き京都に生れさりしも師を

六
尋ね道を問ひ皆京都に集れり其他四方の名家數ふるに違あらず豈盛んならずや

其淵源此の如く其事實此の如くなりしも物換り星移り學風變遷古老凋謝して後に繼人無く平安文學の衰へたる未だ今日の如く甚しきはあらざるなり是れ甚た歎慨すへしといへとも先哲の住せし所其遺品の多きは猶全國に冠たるものあり是れ京都の特色として他に誇るに堪へたるどころなり

此淵源と事實を有するを以て充分に蒐輯せんには優等の物猶多かるへきも我か寡交陋聞なるご時日の急なるを以て意の如くならさりしは甚遺憾とする所なり嚮に展覽の際には其所藏主別に陳展せしも今回は

之を其學派に大別し又其學派の起りし年代により粗ほ部分類別して之を編纂し各家の小傳を附け其物品に解説を附け其文字の細かにして讀み難きは別寫して全文を附けたり聊か觀覽の便に資せんか爲めなり又先哲の遺稿にして未だ世に出てさるもの猶多く筐底に藏し蠶餌になりつゝあるもの少からず是皆其人の心血を注ぎしものなれば今に合ふご合はざるに論なく深く惜しむへきものなり古人も先哲の遺稿を將に逸亡せんごするに保存するは其功德遺骨を收葬するよりも多しご云へり己も不肖ながら身を筆硯に委するを以て此感情極めて深きにより心を盡して收輯につごめたり然れ共全部は撮影なしかたきを以て其

卷首或末文また主要なるところを寫眞せしめたり一斑といへともまた以て全豹を窺ふに足るへし就中最も多きは荷田春滿皆川淇園山本亡羊にして春滿の如きは多くは自筆稿本にて其興學啓文中に至老所訂古記實錄亦多また臣終身精力用盡古語といへるもの也最も貴重すへし

思ふに近來寫眞帖の流行は日に甚しく甲乙相競ひ互に新奇を争ふもの、如し然るに美術流の物の外は其解説粗笨にして其要を得るもの甚た少なし概ね一時の玩具たるに過ぎさるか如し我か微力なる固より及ふところにあらさるも今回の編纂は頗る之を選を異にし竊に先哲の遺徳餘光を發揚せんごするの精神を

以てせり其間優作を遺して然らざるものを加へし如きもあるへく其人に對して或は慊然の感無きにあられごも是れはわか眼識の乏しきによるものにて自から其責を負ふに吝ならさるへし之を要するに是れ皆先哲の遺影遺品にして其人の風采仰くへく其人の學徳欽すへし固より一小冊子に過ぎされごも苟も此に對して自から鑑みる所あらは其進徳修業の上に於て綽々ごし餘師あらん先哲の靈も必ず優然ごして降監あらんごごを知る切に祈る見ん人一般寫眞帖の觀をなすごご無からんごごを

明治四十一年天長節

湯本文彦

先哲墨寶

解説

藤原惺窩先生肖像幅

京都市

林光院藏

紙本半截下に惺窩先生儒巾道服の半身像を寫し上に細字にて後水尾天皇御製惺窩文集序を寫したり先年林光院なる先生の墓を修理せし時富岡鐵齋か舊圖を寫して寄附せしもの也按に後光明帝は希世の英主に在まし深く王室の式微を慨き正學を講明し人心を正くし大に爲す所あらんとの御志あり特に碩儒を宮中に召し經書の講義を聽かせ給ふ一日惺窩文集を叡覽あり深く其學說を信し人物を慕ひ其世を同くせざるを恨み特に其序を御製あり人臣の遺著にして御製あるは實に曠古の榮典なり宛も宋の孝宗か蘇軾の遺文に感し御製の序文を賜ひしと相似たるものあり帝

二
の御製の中に朕偶請而觀之、則忘食忘寢、また如龍獲珠不釋、造次必於是、顛沛必於是、朕於先生、不見顔色、不通言語、而百年神交、如合符節の文あり、其敬感實に深しといふへし、此時帝は御年甫て弱冠にして先生歿後凡三十年なり、其地下の喜果して如何そや、先生眉壽を保ては九十前後に當るへし、先生既に歿し帝亦數年ならずして崩御あり、敬旨を遂げさせ給はさりしは實に萬歳の遺憾といふへし、今其御序の細字にて讀み難きを以て其全文を抄出す。

後光明帝御製惺窩先生文集序

蓋聞文者貫道之器也、自昔年大吳八卦書契之作、延延綿綿、如天地之不可易矣、如日月之不可息矣、禮樂政令之經緯乎穹壤、洞徹乎古今、法度教化之融液乎遠邇、周遍乎内外者、不亦基乎是哉、近世有北肉山人惺窩先生者、寬仁大度之君子也、幼而穎悟、一覽千言、七過萬句、弱冠而蚤通經史及諸子百家之書、莫事不備、莫物不詳、其爲學也博文強記、故其爲理也精密明辨、其爲友也范袁張彪之徒、王戎仲容

之屬、朝馳騫乎書林、夕翔翔乎藝園、非其道、雖高車駟馬不顧焉、棄之如敝履、從其道、則簞食豆羹亦足以頤神而保年也、義士仁人、慕德望風、出入其門、往來其道者、不可勝計、於是乎空谷之足音、晦暝之日月、歟、而彼精微妙渺、雖猶不可階天而升也、儘亦得先生之一體者數輩、日新月盛、自此以後、百姓尊信聖賢、誦說仁義、其恩惠德澤所以蒙天下後世者、至矣盡矣、斯時也、談士雲起、狙詐星聚、然道德之說罕有所聞也、先生獨悼斯民之墜於塗炭、苦此道之湮於塵俗、屢遊說諸侯、上述堯舜、下陳周孔、然滑稽口給之士、皆以爲迂遠而濶於事情、故不爲世用、乃退廬市原、隱居放言、恣思丘壑、任情山林、沈吟小詩、作爲文章、而其遺稿餘篇、紛々藉々、惜其無統紀者、其子爲景探而輯之、間亦竊附己意、所以裨補其缺略、紕繆者數卷、名曰惺窩文集、朕偶請而觀之、則忘食忘寢、萬慮以澄、百節以通、耳目以融、肺腑以清、猶如龍獲珠不釋、造次必於是、顛沛必於是、噫、朕於先生、不見顔色、不通言語、而百年神交、如合符節、果何之謂也、所視所言、所勤所蓄、庶幾乎其不差也。

馮咏嘆之餘、聊託管城子、妄爲之書、乃譬暉星之繼朝陽、飛塵之集華嶽云爾、

四

藤原惺窩名は肅字は歛夫中納言家家十二世の孫世々播磨三木郡細川村を領し此に居る父爲純といふ別所長治と戦ひ其長子と同一く之に死す惺窩若くして家難に逢ひ去りて僧と爲り相國寺に居る妙壽院と號し舜座首と稱す異材あり佛を去り儒に歸し程朱の學を信し卓立して道を唱ふ從學頗多し徳川家康深く之を重んず或は之を阻むものあり聽かす召聘應せず市原に閑居し道を講し文を娛しむ林家及松永昌三那波活所管玄洞角倉素庵等其門に出つ元和五年九月十二日歿年五十九相國寺中に葬る我中古以來學問地に墜ち僅に僧侶の間に存せしか此に及ひ文教興隆し聖教世に明かなりしは一に惺窩の功なり惺窩遺集十七卷あり後光明帝淑覽深く感賞し其時を同くせざるを恨み御製の序文を賜はれり實に曠世の美事たり明治二十四年特に正四位を贈らる

二

惺窩先生寄林道春尺牘幅

京都市

雨森菊太郎氏藏

堅紙に書し羅浮堂下に宛て惺々どあり東鑑跋語公羊傳奇正編等の事あり筆力縱横雄勁なり

三

惺窩先生寄眞面山校書室尺牘幅 同

角倉玄遠氏藏

切紙尺牘にして眞面山校書室に宛て殘葉とあり周詩洗心經到來珍重云々どあり

四

北肉山莊圖幅

同

富岡鐵齋氏藏

紙本半截淡彩北肉山莊は藤原惺窩先生の山莊にて愛宕郡市原にありしか今荒廢せり此圖の原畫は狩野山雪筆にて小幅なれども山莊の狀を見るへし上に二絶句あり林羅山堀正意の詩也此幅は富岡鐵齋の舊畫を寫したるものなり

道學勃興桑海東、高標清節嘯松風、背山別業似澁水、庭草生々意思中、
後學羅浮散人贊

北肉峰頭世外身、本朝始發六經眞、四垣松竹一庭草、即是先生樂志

五

春

杏庵正意拜贊

五

奉先堂記卷

愛宕郡二ノ瀬 今江澄氏藏

奉先堂は林家の別厓にして愛宕郡二ノ瀬に在り延寶元年林大學頭信篤の其領地なる二ノ瀬に其祖道春の祠堂を立て奉先堂と號せしもの也此記は春齋の門人竹洞人見宜卿をして其事を記せしめしものにて文章快暢事實明瞭なり林家は信篤の志を継ぎ世々の神主肖像又道春の遺物遺集等を納め下司今江氏に其祠事を掌らしむ歷世相承け怠る事なし然るに廢幕の後全く廢止に屬し今は荒墟となり唯奉先堂碑の荆棘の間に存せるのみ但其遺物は概ね今江氏に保管せり其物は神主肖像遺書遺物文書甚多けれど今其主要なるものを展陳す此記は長文大卷なるを以て其首尾を撮影し全文を此に録す

奉先堂記

曾子曰慎終追遠民德歸厚者今國子祭酒兼弘文院學士整宇林先

生在焉先生尊祖羅山文敏公平安城人幼而穎悟強記出類拔萃時人稱神童長而該博通六經諸子百家之書無不悉記之然後受學於藤惺窩道德日進始講朱文公註四書論說五經負笈之徒盈門成市世僉謂本朝儒宗也東照太神君特召侍講駿府賜采地數邑於京師之外北山二瀬邑其一也邑人傳稱昔維喬親王潛居小野及薨其侍臣十六人相攸斯谷耕畝采薪以爲恒產邑民皆其裔也故賜綸旨免課役世々以禁廷節會燒籌爲勸近世爲官士之領邑然里人每年正月詣京兆尹賀歲初道今如舊云明曆三年春正月二十三日文敏公逝年七十五有羅山文集百五十卷行于世達于中華朝鮮其行實不言而可知也鷲峰文穆公繼文敏公之家爲儒宗傳領其邑延寶元年癸丑春邑長今江清長來在江府一日國子先生命清長曰汝所居之邑峰廻谷轉境靜湖潔非車馬紛擾之處矣文敏公創我業起我家而初所賜之一邑也汝居近地特擇一僻靜而占數畝築一堂尊崇文敏公之畫像藏其全集於後房歲時以溪毛爲鼎實以潢汗爲玄酒而享

之，則爲不朽之盛事乎，是吾之願也。清長喜色碎而，肅然垂淚而起，對曰：嗚呼！美哉！先生至孝之餘志也。山間之地，乃從其所好，便有矣。然爲斯舉也，千載良計，而一旦難決之。老僕還鄉，與村民商議之，而地基延袤，棟宇結構，以作一圖獻之。奉命決事矣。先生曰：唯，任汝所計耳。不借民力之費，不求輪奐之麗，以免風雨之侵足矣。時尊翁文穆公聞其盛舉而大悅。清長自祖先世居二瀨邑，其性朴實，少而勤，侍文穆公有年所，後命爲邑長，治事精覈，邑人服其敦誠。及老無子，讓家於其弟，自作枵陋亭於屋後，居焉。文穆公及先生厚遇之。清長歸邑，重先生之命，遽與邑人胥議，遂巡兩山之間，點檢其地。枵陋亭之西丘，隔澗得高敞之地，曰政所，便作地圖，遠獻先生。先生報曰：可也。二年甲寅春正月，清長贖村中之役夫，轉石伐木，平政所地。二月入其所自管之山，採巨材。三月定廣袤，開礎基。夏四月，齋戒祭后土之神。五月，擇良匠，經營室堂。而上梁，悉招村民飲酒，祝先生閭閻之繁榮，以告其落成於江府。先生聞之，曰：奉先堂，名前堂曰觀薦，爲斯地也。山下有溪，乃鴨河之源也。一橋

通村，村蹊上行數十畝，而山上有觀薦堂。西北數步，便是奉先堂也。堂而東南，左臨深谷，清泉涓々，掌上而望，則東山有守谷社，樹林森々，山下是若狹丹波之山路也。西則岑蔚有山神社，北眺則鞍馬貴船之山，歷々可數。南下視則一村編戶，流水接鄰，竹樹擁牆，賣薪之夫，戴柴之女，交袂負米，出京入谷，乃山間之朝暮也。春日之麗，則林端霞飛，芽如黃金，巖腰雲暖，花似彩錦。夏陰之茂，則涼風蟬吟，清流螢亂。秋風之起，則白雲紅樹，畫屏四圍，梨柿芋栗，園圃成富。冬嶺之靜，則落葉滿徑，飛雪連嶺，乃山間之四時也。其山寬闊，其境寂閑，行人常稀，猿鳥來還，可謂物外佳趣也。三年乙卯冬十一月，清長初開奉先堂，灑掃階庭，新揭文敏公之影像，瀝紫香茶，拜趨盡誠。爾後京師親戚及舊門生僉來拜之。清長以歲時供菜致祭，而常無懈怠。文穆公與先生欣然賞之，有欲大其門牆之志。嗚呼！八年庚申夏五月端午，文穆公奄然易簀。先生居喪，於是暫止。初，文敏公有適子，曰左門，名叔勝，字敬吉，幼而岐嶷，聰明拔羣，總角而通四書六經，無書不讀，過目不忘。常尊程朱，排異端，覃思

道學世以爲神童、文敏公喜而自負曰、我有是子、我死不恨、十七歲罹疾不幸短命、

文穆公有適子、曰穎定先生、名懿、字孟著、號勉亭、又稱梅洞、其性穎悟而溫良、卽童誦經史、博學強記、力行方正、有智量、巧文能詩、筆妙作法、文敏公以爲我家主器、文穆公喜其克家、世人僉服其才德、一旦得病、遂不起、歲二十四、于嗟有梅洞集、行于國、達于中華、國子先生有適子、名惠、號鷄峯、扁書房曰玲瓏窓、生而才識明敏、博通典墳、數歲屬文、十三歲遇朝鮮聘使、通政大夫尹趾完、一見稱其俊秀、與學士成琬、李聃齡、裨將洪世泰、就席唱和、應對如響、各服奇才、琬喟然而嘆、書大字贈之、曰四世之美、古來所稀也、時人皆言斯人而能揚家聲、吁惜乎哀哉、十六歲臥病、忽焉棄世、嗟哉賢哉三嫡、有天縱英才、而天何速奪之乎、而又無嗣、何其無福乎、先生平日歔歔嘆息、頃年清長來府、先生噓之曰、往歲命汝作奉先堂、汝日夜黽勉、有土木之勞、吾常哀斯三子之無嗣、汝閱堂側之一地、作三哀堂、則吾願足矣、清長拜命唯々、及歸二瀨、

構一堂、不日而成、奉三嫡子之像於室、龜以時祭之、元祿辛未之冬、清長來謁先生、以無奉先堂記爲遺憾、先生命僕叙其事、僕陪其門、受其教、既四十餘年矣、斯堂之成而遺萬世不朽之美者、豈不欣感乎、如文敏公之大名、鳴於我扶桑及異域、兒童走卒無不知之、其遺文壽梓、行於宇宙、都鄙華夷無不讀之、然其壘在忍岡、而斯堂在彼邑、則陵谷之變、亦可安其遠慮乎、樵採之禁、亦可期其崇祀乎、果知先生慎終追遠之誠在茲矣、如清長致誠竭力、村民祇役奔走、各有感孝志之深、不爲以勞、果知彼民德歸厚者、亦在茲矣、

元祿五年壬申夏五月

門生竹洞野宜卿識印二

六

奉先堂碑文幅

愛宕郡二ノ瀨 今江澄氏藏

大學頭從五位下林信言の選竝書にて大畫箋紙大の碑本也信言は林家第五世にて信篤の孫也

奉先堂碑

奉先堂者、延寶二年甲寅、顯祖鳳岡子之所建、而在二瀨采邑、此邑者

慶長十六年辛亥高祖羅山子當神君創業之時所賜也、由此以來肇
 倡聖學、始樹儒風、或制法令、或預政典、出則奉職、入則勵業、播教四方、
 垂名千載、位叙法印、稱戶部尙書、曾祖慈峰子當猷廟之時、克述其志、
 克嗣其職、該通倭漢古今、奉命編書、研精講經、叙法眼、至法印、稱禮部
 尙書、賜號弘文院學士、顯祖風岡子當嚴廟之時、襲祿受職、當憲廟之
 時、嗣世興家、進則侍講之勞、獲于君、退則修身之心、慎於獨、初稱學士、
 後任祭酒、釋奠祀典、經筵講經、未嘗曠也、增秩改官、進班立功、歷事昭
 廟章廟、至德廟初、日日趨朝、時侍座、讓祭酒、稱內史、致任而伺起居、
 退休而給俸祿、恩命超倫、懇遇異等、家父龍洞子當憲朝昭廟之時、試
 業奉職、講經成學、及德廟之時、襲祿傳業、至今大君之朝、讓職告老、初
 列亞侍中之班、領國子監祭酒、後入親軍帥之次、稱戶部員外郎、侍讀
 儲君、奉祀聖堂、可謂勤矣、可謂勞矣、余亦幸遇德廟之時、執謁試業、皆
 如前規、奉職襲祿、皆如故事、初任秘書監、後領國子監、講官之職、祭酒
 之任、皆經也、俯則感昊天之神助、與明君之恩惠、仰則思往聖之道德、

與先祖之威名、五世具職而事九朝、一家傳業而踰百年、是故建碑於
 奉先堂之前、以續祖考之志、而奉高曾之靈、又有三哀堂及觀薦堂、此
 皆風岡子命邑宰今江清長所經營也、語在其記中、茲不復贅焉、繫之
 以銘、其辭曰、

高祖遇時	大學儒風	生于洛西	卒于關東	曾祖繼學
弘立勳功	書達倭漢	職克始終	顯祖興道	吾家英雄
恩命殊厚	盛名益隆	家父守業	職位不空	乃告其老
乃息其躬	余亦懇遇	與四世同	君恩恭敬	聖德尊崇
去人欲私	從天理公	內顧任大	外誘業洪	迺今勒石
以彰吾衷	子孫傳業	濟美無窮		

寶曆八年戊寅仲秋中浣

國子監祭酒朝敬大夫林信言識并書

七

林文敏先生肖像幅

愛宕郡二ノ瀬 今江澄氏藏

絹本中幅淡彩唐巾深衣立像文敏は即ち羅山先生也側に題字あり

曰く文敏先生羅山林君像明暦三年丁酉正月二十三日歿年七十五以法印狩野探幽所圖寫之藤原爲信筆

林羅山名は信勝一名は忠字は子信京都の人夙に學を好み藤原惺窩の門に入り程朱の説を研め名聲大に揚る慶長中徳川家康召して其説を聞大に之を任用す法體と爲り道春と號す民部卿法印に叙す顧問に備はり文教を司とる家學此より大に興る林家の第一世なり干戈纒に戢まる時に當り儒學を唱へ文教を振興せしめしは此人の力なり明暦三年正月二十二日歿す年七十五諡して文敏先生といふ著書甚多く世に公行せらる

八 林鷲峰先生肖像幅

愛宕郡二ノ瀬 今江澄氏藏

絹本中幅淡彩唐服深衣座像文穆は即ち林家二世鷲峰忠也上に題字あり曰く鷲峰林先生像

林鷲峰名恕字子林後之道と改む又名春勝又春齋と號す羅山の第三子也元和四年京都に生る那波活所に從學す父に江戸に從ひ式

部卿法印に叙し弘文院學士と號し文教を總ふ其纂輯する所本朝通鑑寛永諸家系圖等あり延寶八年二月二十八日病歿年六十三諡して文穆先生と云ふ

九

林正献先生肖像幅

愛宕郡二ノ瀬 今江澄氏藏

絹本中幅淡彩五位衣冠座像正献は即ち林家三世整字信篤也上に題字あり曰く正献先生林府君像下に落款あり藤原保信謹圖之
林鳳岡名は信篤一名は懸字は直民羅山の孫鷲峰の子也克く家學を繼ぎ大藏卿法印に叙し弘文院學士と稱す初め羅山聖席を上野に造りしか此に及び幕府命して湯島臺に聖堂を營し更に敷地を賜ひ聖堂を大成殿と號し其額を賜ひ大に祭儀を修めしめ將軍自から之に臨み以て恒例を爲す林氏の法體を止め蓄髮せしめ從五位下に叙し大學頭と爲る此より儒者始めて士人に伍するを得たり鳳岡奉先堂を其領地二ノ瀬村に建て羅山以下を祭り以て別席となす享保十七年六月一日歿す年八十五諡して正献先生と云ふ

林氏此より益々榮わたり

一〇 林快烈先生肖像自贊幅

愛宕郡二ノ瀬 今江澄氏藏

絹本中幅彩色素袍座像上に自贊あり快烈は即ち述齋林衡の諡號也

林述齋名は衡字徳詮又棠陰と號す岩村城主松平乘蘊の第二子也年二十六慕命を以て林家を繼ぐ大に心を教學に盡し奏して聖席を私邸より別ち其規模を莊大にし覺舎を建築し教育の實を舉げ試業を行ひ人才を養成す學風大に振ふ安積良齋佐藤一齋等其門に出つ其監輯する所徳川實記舊聞褒稿等の大著編あり幕府重用加祿三千五百石に至る林氏中興とす天保三年病歿年七十一諡して快烈先生といふ子孫甚多く世に顯る

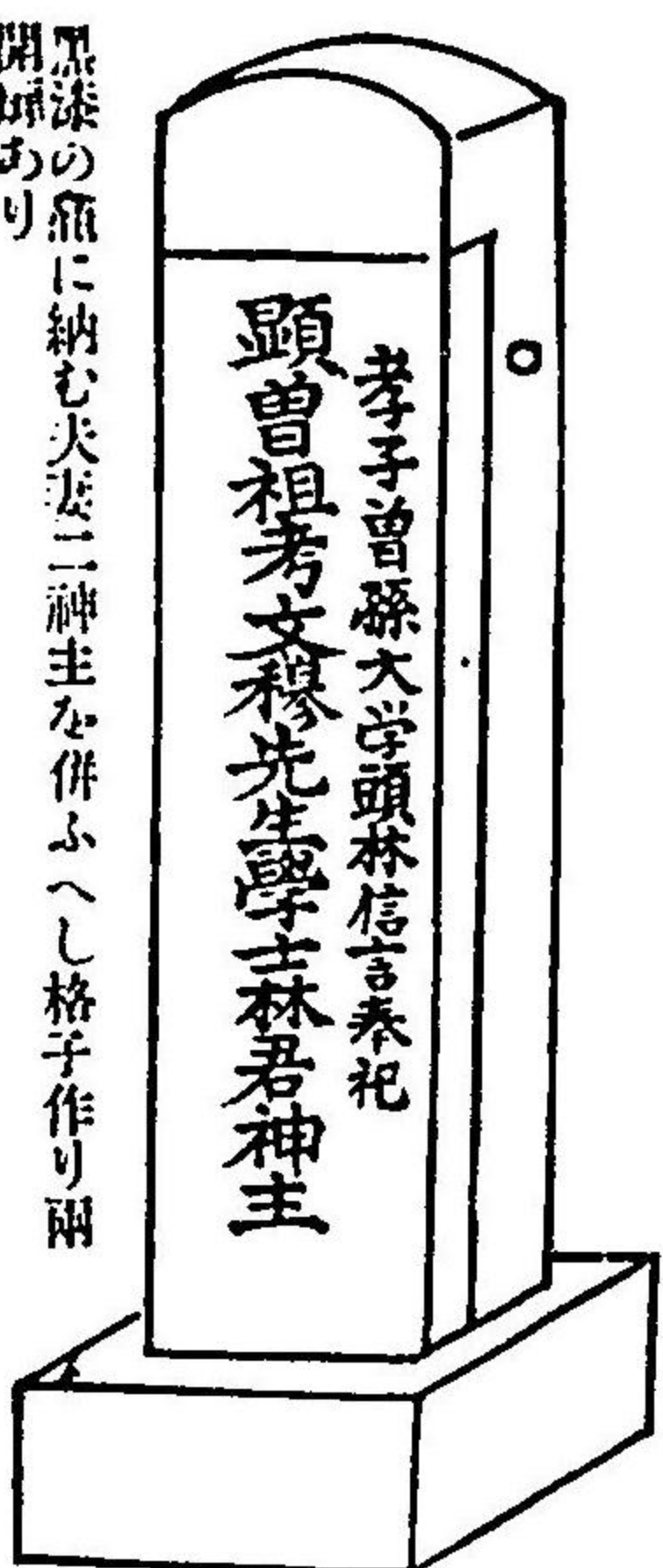
一一 孔子神主及林家神主

愛宕郡二ノ瀬 今江澄氏藏

石造奎狀高一尺二寸一分廣一寸八分五厘厚一寸一分方石附あり廣四寸一分高一寸三分面に正楷にて大成至聖文宣王と刻す傳に

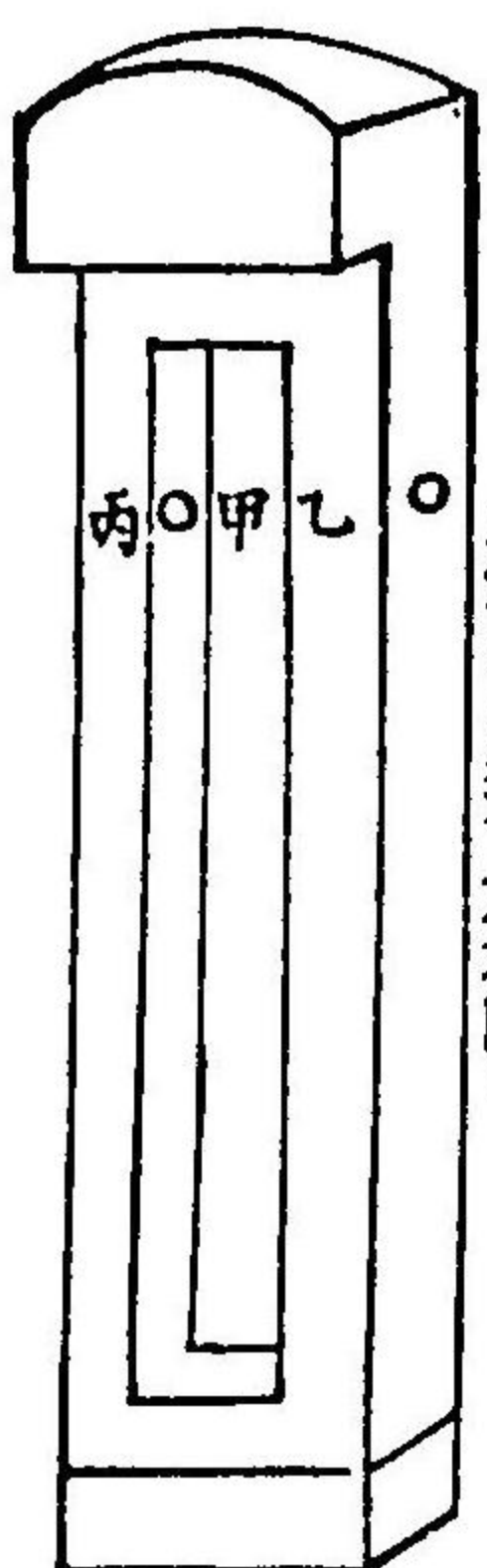
明國舶來也と云ふ黒漆厨子に納む扉兩開き其大さ神主に稱ふ神主は多く有れども散亂して調査し難し今回出陳せしもの、み之を記す

神主は栗材にて高七寸三分臺あり笏狀にして左の如し



黒漆の箱に納む夫妻二神主を併ふへし格子作り兩開扉あり

此穴内に通す左右同し



乙、元和四年戊午五月二十九日生于京都
甲、弘文院學士林恕之道神主
丙、延寶八年庚申五月五日卒于江戸

一三 林信篤從五位下位記卷

愛宕郡二ノ瀬 今江澄氏藏

元祿十四年正月十三日林家の初めて叙位せられし時の位記の本
書にて天皇の御璽あり文化中林家より道春以來の任狀を奉先堂
に納めし内也

一三 林信篤大學頭繪旨

愛宕郡二ノ瀬 今江澄氏藏

位記と同時に文書なり林氏大學頭に任せられし最初の文書なり

一三 寶鑑餘光林鳳岡跋文自題

愛宕郡二ノ瀬 今江澄氏藏

本書は林鷲峰の將軍の旨を奉し編纂せし國史の一部にして九冊
あり林信篤八十四歳享保丁未孟冬の筆也

林氏の奉先堂に納めし著書にて羅山全集鷲峰全集詩經私考及此
書あり皆當時の寫にて各信篤自筆の識語あり珍本也

一五 奉先堂全景圖幅

愛宕郡二ノ瀬 今江澄氏藏

紙本中幅淡彩にして奉先堂の全景にて三哀堂羅山長子叔勝鷲峰長子
茲風岡長子惠の祠堂觀薦堂皆備の日文化年中其實景を寫したる者なり

一六 林羅山大阪冬陣所川甲冑

愛宕郡二ノ瀬 今江澄氏藏

總黒塗具足一領兜は頭成形鎧櫃一荷に納む外匣の蓋に慶長十九
年大阪冬陣所用とあり

一七 林羅山寄角倉了以書狀幅

京都市 南大路勇太郎氏藏

角與一様人々御中として道春の華押あり按に了以宇治川開修通
船の事を以て徳川幕府に願出しに對し其事情を道春より了以に
報せし書狀なり此願案今亡す其年は詳かならず舟上下候へは彌
よく候縦舟上下不成共彼岩石開候て湖水こみ不申候へは六七萬
石上山出來候はん儘よき事にて有之由被成御誕候攝津河内もさ
ほど河水もこみ候事有間敷と各申候云々轆轤にて大石をは引倒
し候ても可能成云々其心を經濟に用ひしを見るへし又學校屋敷
いつかたにても廣く候て尤候云々とは道春京都にて漢學學校を
起す事を願ひ既に許可せられし事也此事は大阪役の爲めに中止
となりて果さゝりき菅家文三代録雖不具可借給候云々とは此時

戦亂の餘書籍乏しく了以の家蔵書多きを以て羅山等も之を借りて講究せし事を見るへし

一八

林羅山贈石川丈山書狀

京都市

杉浦三郎兵衛氏藏

詩文十數章を合卷とせしもの、内に在り十月三日石川丈山山人
凹凸窠に宛てたる漢文の尺牘也

一九

三宅亡羊自贊畫幅

京都市

南大路勇太郎氏藏

矮紙横物に春蘭を寫し絶句を題したり

腕蘭一莖應素白道人之求

亡羊子

清香無處別相通、本在深林幽谷中、惟菊惟蓮又梅葉、列班獨入紅絲
桐

三宅亡羊寄齋と號す和泉の人早く京に入り大徳寺中に讀書す學
に常師なし古註を以て教授す石田三成之を聘用せんとす應せず
學徳益々高く近衛信尋黒田長政等深く之を信し屢々其講説を聞
く後陽成後水尾二帝特に召して經を御前に講せしめ給ふ且つ願

問に備はり恩賜厚く東福門院の入内其間周旋する所有りしとい
ふ慶安二年六月十八日京都油小路の家に歿す年七十應峯の山麓
に葬り題して三宅亡羊子之墓と曰ふ此地は朝廷より特に賜ひし
墓地なり養子道乙其業を繼ぐ

二〇

松永尺五元日七律

京都市

廣田金兵衛氏藏

其詩に曰く

歲律回新人境俱、雍熙壽域迨遐陬、道家仙伯抱淵靜、滿座高明祝句
愉、舜典格文調玉燭、孔經揭首極規模、恩光朝露若無隔、秋實春花勿
忘吾、

松永昌三名は遐年尺五堂と號し又講習堂の號あり京都の人にて
貞徳の子也貞徳俳諧の元祖にて一世に鳴る昌三藤原惺窩の門に
入り程朱の學を修め年十八關白秀次の爲に學を講し又加賀侯に
遊事し優待せらる後京に歸り春秋館を開き其徒に授く板倉京尹
其徳に服し別に地を二條堀川に與ふ講習堂是なり木下順庵等其

門に出つ明暦三年六月二日歿年六十六本國寺に葬る講習堂世々其業を傳へしか近年其地は三井邸に入れり

二二

那波活所聞杜鵑絕句幅

京都市

山本規矩三氏藏

紙本全幅行書此詩は活所初めて惺窩に謁せし時席上にて題を得て作りしを惺窩一誦して其奇才を歎し之か爲め其名一時に聞へしといふ活所も之を喜び一生名譽とせしを見るへし

那波活所名方字は道圓播州姫路の人世々豪農たり活所若きより學を好み京に上り藤原惺窩の門に入り程朱の學を修め其高弟たり元和元年名儒を以て徳川家康に召され又肥後加藤氏に招かる後更に紀伊侯頼宣に聘せられ五百石を食む十九年幕府召して寛永系圖を編纂するに預らしむ病を以て辭し京に歸る講學益力む正保五年正月三日歿す年五十四

活所剛直忠實常に曰く人臣たるもの常に處しては死を以て君を諫め變に處しては死を以て國に殉すへしと頼宣深く之を敬重し

賜賞甚厚し子木庵名守之繼て紀州家に仕へ其弟魯堂平安に教授し皆克く家學を繼けり

二三

那波活所山寺避暑詩幅

京都市

山本規矩三氏藏

紙本全幅行書

二四

江村專齋遺墨幅

京都市

廣田金兵衛氏藏

紙本小幅下に旗竿を折られし旗一旒を畫き其上に題字あり專齋は寛文九年百歳にて歿し元龜年中に生れし人にて此記事も其幼時に在りし事に屬せり

江村專齋名は宗具學を好み程朱の説を主とす兼て醫を業とす肥後加藤氏へ仕へ其後京に歸り津山森氏に遊事す細川幽齋長嘯子と友たり歌を善くす學徳益々高し百歳衰へす後水尾上皇特に召して道を問ひ給ふに些の字を以て奉答す帝感賞鳩杖錢帛等を賜ふ因て賜杖堂を以て其講堂の號とす寛文四年九月二十六日百歳にて歿す善正寺に葬る曾孫北海に至るまで賜杖堂を守り其學を

承く伊藤坦庵專齋の話を録して世に傳ふ老人雜話是也

二四

石川丈山墨跡幅

京都市

廣田金兵衛氏藏

紙本半截臥龍二大字を書す

石川丈山初名は重之嘉右衛門と稱す徳川氏の士世武功あり大阪の役先登功あり律を破るを以て黜けらる京都に閑居し藤原惺窩の門に入り學を修め名聲大に揚る母老ひたるを以て淺野家に任へしか母歿するに及ひ退きて京に歸り一乘寺村に詩仙堂を營み之に居り名を問と改め六々山人と稱し風流文雅自ら娛しむ諸侯召聘皆應せず後水尾上皇時に召さんとすわたらしなの歌を上る上皇嘉尙賜物あり寛文十三年五月二十三日歿年九十其山上に葬り頑仙祠と號す野間三竹碑文を作る詩仙堂京北の名勝となり丈山遺物多く存せり

二五

角倉了以大悲閣碑幅

京都市

角倉玄遠氏藏

角倉了以晚年嵐山に大悲閣を興し閣中に其遺像を安す法體にし

て繩床に踞し鉄を持つ所なり永く其土功を表する所以也其側に

石碑を立つ即ち此文也文は林羅山の選也

吉田了以碑

古云舟楫之利以濟不通嘗聞其語矣今有其人也了以叟其人歟了以姓源氏其先佐佐木支族號吉田者宇多帝之後也云爾世住江州五代祖德春來城州嵯峨因家焉其所居乃角倉地也洛四偶各有官倉在西曰角倉語在沙門石夢窓天龍寺圖記中德春子宗林宗林子宗忠皆潤屋也而仕室町將軍家宗忠子宗桂雅髮遊天龍蘭若嘗學醫術一旦從僧良策彥適溟渤赴大明明人或稱宗桂號意庵蓋取諸醫者意也之義還于本邦其業益進聚中村氏以天文二十三年甲寅某月某日生了以諱光好小字與七後改名了以性嗜工役嘗雖志筮仕而未肯事信長秀吉矣及于前大相國源君之治世也而初出奉拜謁焉慶長九年甲辰了以往作州和計河見舩船以爲凡百川皆可以通船乃歸嵯峨沂大井川至丹波保津見其路自謂雖多湍石而可行

舟、翌年乙巳、遣其子玄之于東武以請之、臺命謂自古所未通舟、今欲通開、是二州之幸也、宜早為之、丙午春三月、了以初浚大井川、其所有大石以轆轤索牽之、石在水中、構浮樓以鐵棒銳頭長三尺、周三尺柄長二丈許、繫繩使數十餘人挽扛而徑投下之、石悉碎散、石出水面、則烈火燒碎焉、河廣而淺者、帖石而狹其河深其水、又所有瀑者繫其上、與下流準平之、速秋八月役功成、先是編筏纜流而已、於是自丹波世喜邑到嵯峨舟初通、五穀鹽鐵材石等多載漕、民得其利、因造宅河邊居焉、玄之嗣焉、子嚴昭受傳之、玄之能書、且問儒風於惺窩先生有年矣、一旦招先生遊遊于河上、奇石激湍甚多、請先生多改舊號、其白浪揚如散花者號浪花隈舊名大瀨、其齊沮環石者號觀瀾盤陀有石相距可二十丈、猿抱子飛超其間者號叫猿峽舊名飛、東有山巖高峻有捷鶴之危巢者號鷹巢、石壁斗絕、貌如萬卷堆者號羣書巖舊名出合、此處有石似門廣五丈高百餘尺者號石門關、有湍急流、船行如飛、號鳥船灘舊名鶴川、灘隣於水尾、世傳清和帝嘗來觀魚于此焉、岸有山岩高可五十丈、其

下水平衡、如水戴山、取山下出泉蒙之義、號曰蒙山、皆有倭歌、在其家集、惺窩所遊觀止此焉、復有石方三丈許、其面如鏡、聳於水崖、號鏡石、又有浮田神祠、世傳遠古之世、丹波國皆湖也、其水赤、故曰丹波、大山咋神穿浮田、決其湖、於是丹波水枯為土、乃建祠而祭之、以鋤為神之主、此神即是松尾大神也、下此則愛宕龜山在左、嵐山柱右、其勝區不可枚數、十二年春、了以奉鈞命、通舩於富士川、自駿州岩淵、挽舟到甲府、山峽洞民未嘗見有舟、皆驚曰、非魚而走水、惟哉、惟哉、與胡人不知舟何以異哉、此川最峻、甚於嵯峨、然漕舩通行、州民大悅、十三年、又命了以、試自信州諏訪到遠州掛塚、可通舟、天龍河否、了以雖即漕、蓋然無所用、故至今舟少、方是之時、營大佛殿于洛東、大木巨材甚勞、挽牽、了以請循河而運之、乃聽之、於是自伏見里浮之河、泝而擊焉、了以見伏見地卑於大佛殿基可六丈、即壞其高、為是於卑處、若河曲處置轆轤、引起、復浮水、水平如地、先是呼許呼邪者、五丁愛之、萬牛難之、於是水運不勞力、不日材木悉達、人皆奇之、十六年、了以請行舟、鴨河乃聽

之、因自伏見河漕舩遡上流、達二條、至今有數百艘、遂構家河傍、使玄之居之、玄之男玄徳嗣焉、十九年富士河壅嶮、舟不能行、鈞命召了以有病、玄之代行治水、又能通舟、三月始役、七月成之、聞了以病急告假、玄之未入洛先二日、了以歿、實慶長十九年秋七月十二日也、時六十一歲、此歲夏營大悲閣于嵐山、山高二十丈計、壁立谷深、右有瀑布、前有龜山、而直視洛中、河水流於龜嵐之際、舟舩之來去、居然可見矣、其疾病時謂曰、須作我肖像置閣側、据巨綱爲座、犂爲杖、而建石誌、玄之等從其遺教、玄之錄其事以寄余、請之記、件件如右、昔白圭之治水、以隣國爲壑、張湯漕褒斜嶮、不能通、今了以疏大井河、淪鴨水、決富士川、凡其所排通、開、則舟能行、不臭其載、人皆利之、與白圭張湯所爲大異矣、所謂舟楫之利、以濟不通者、不在茲乎、宜哉、垂裕後昆、余與玄之、執交久矣、故應其請書焉、且旌之以銘其詞曰、

排巨川兮舟楫通、浮鴨水兮梁如虹、矧復鑿富士川兮有成功、慕其錫玄圭兮、笑彼化黃熊、嵐山之上兮名不朽、而無窮、

寛永六年冬十一月 日

角倉了以名は光好與七と稱す、後法體となり、了以と改む、又玄叟と稱す、山城國嵯峨の人、父宗桂醫を業とし、明に入る、了以學を好み、經濟に長し、尤も水理土工に明らか也、慶長八年、徳川氏の命により、巨船を造り、安南に貿易し、利を得る、巨多同十一年、幕府に請ひ、私費を以て、保津川の漕路を開らき、數月にて、其功を成す、十二年命を奉し、富士川船路を通し、十三年大佛の造營に當り、水利を用ひ、大木石を運輸し、十六年高瀬川を堀り、京東の漕路を通し、其功利皆後世に及ぶ、十九年嵐山に大悲閣を建て、肖像を此に留め、七月十二日歿す、年六十一、二尊院に葬る、子孫世に保津高瀬の二川を管し、以て徳川幕府の世を終る、近年其功を追賞し、正五位を贈くる、水利に頼るもの、碑を高瀬川の尾に建て、其功を紀せり、

二六

徳川幕府角倉了以に富士川疏鑿を命せし朱印幅

京都市

角倉玄遠氏藏

二十九

慶長十二年六月二十日徳川家康朱印

一通

慶長十二年七月十一日徳川秀忠朱印

一通

丁以既に保津川を開通し功を成せしを以て富士川開修の事を命せし朱印なり

二七

角倉了以に保津川通船を許可せし老中連署狀幅

京都市 角倉玄遠氏藏

角倉與一殿正月十五日大石見守本上野介とあり大石見守は大久保石見守本上野介は本多上野介也與一は即ち了以なり此時了以保津川通船の事を計畫し私費を以て工事を起さん事を願ふ徳川幕府より之か許可を與へし令狀にして當時老中の連署なり按に慶長十一年の正月なるへし與一即ち之か工事を起し躬から跋渉督勵し三月より十月に至り能く此大工事を竣成し功利今に施せり此文中にいかにも尤に被思召候云々運賃などの儀も能程に被相定尤候其許能様談合候てほらせられ尤候とあるを見ても幕府

の委任して掣肘の憂なく了以の設計規畫周到にして遺算なかりしを見るべし

二八

角倉了以贈松尾社禰宜尺牘幅

京都市 角倉玄遠氏藏

保津川開通に付嵐山に關係あるを以て松尾社と交渉せし文書なり

二九

角倉了以與保津村小太郎書狀幅

京都市 角倉玄遠氏藏

同上の件に付其川上の保津村も關係あるを以て與へし狀なり

三〇

角倉素菴行狀記木碑幅

京都市 角倉玄遠氏藏

鐵櫪大板高六尺三寸廣三尺許なるに彫刻し之を嵐山の千光寺に安せり此板は素菴か安南貿易に獲たるものなりといふ文は堀正意の選にて事實詳明素菴の行狀を見るに足れり其全文を記す

儒學教授兼兩河轉運使吉田子元行狀

廣長元和之間了天下文明之運勃興儒教荷擔斯道者北肉藤歛夫先生也邇洙泗之本源極伊洛之淵奧泳其流者五六輩公用志不分

遂通道德性命之說、而排時俗浮靡之文、世所稱素庵先生者也、公歿之翌年、嗣子屬余布行狀、余交遊二十年、何所敢辭焉、公姓源氏、吉田諱玄之、後改貞順、字子元、小字與一、別號素庵、其先出自宇多皇帝、帝孫左府雅信、初賜源姓、累葉簪笏、至秀義受封近州、爲佐佐木氏、生數子、俱佐賴朝、削平海內、子枝孫葉、蔓延于近州、以所封之邑爲氏者數十家、猶楚之二放魯之三桓、吉田其一也、六世祖德春有故去國、到山州嵯峨、相攸角藏地居焉、隣里懷其德、氏族滿閭閻、種之桑麻、竹木以助財用、子孫克保其富、四傳而至先考了以、了以天性敏捷、習李悝術、得鄭國智、豐饒倍前、元龜二年辛未六月五日、生公於私室、賀者皆曰真英物也、天正甲申公歲十四、性不眩放怪譎矣、初讀大學、次論語、數年之間、唐宋詩文皆通誦之、同戊子與伯父侶庵往相國寺謁欽夫先生、先生授以六經、語以性命之理、公一聞之、耿耿有馳聘千古之思、攤卷唔呶、晨夕不輟、倦則吟倭歌而暢性情、暇則學書法而得精神、去近時之早弱、復蘭亭之雄健、別立一家、世傳其流、公平生慕李氏之山

房藏書數千卷、本朝秘官府舊紀、番舶載來歷代典籍、及至稗官小說、無不貯積而哀集矣、博涉諸子、未得要領、於是翻然而悔、釋然而悟、曰、聖人之道豈止於此乎、寤寐反側、思之不措、不拘於時、見欽夫先生、叩以六經旨趣、先生曰、六經心學也、正心之外、別無餘法、公服膺而不忘、又問古今文章、先生以乎自所輯文章達德錄百餘卷及綱頌示之、曰、生有志於文章、招撫古今注評、去其煩冗、擇其精粗、則不翅助予之筋骸之勞、將又裨補於學者而有益後世乎、是君子之心也、生懋哉、公謹受教、自是午不釋卷、數十年之間、唯區畛別、條分縷析、殆足爲成書矣、秀吉之征朝鮮、刑部員外郎姜沆因而來朝、投赤松家、赤松氏素與先生善、先生會姜沆問釋奠儀、赤松爲之假張大成殿於野外、建聖牌、設祭器、姜沆與先生及公同行焉、祝文樂章之協律、獻禮拜揖之中度、受傳而歸、嵯峨招先生及姜沆對談有日矣、先生題書院曰期遠亭、姜沆爲之記、慶長癸卯、先考受前源相國臺命、通舶於安南國、公請先生查理商舶規約、協同南夷意旨、每歲開洋稠載而歸、于今長子玄紀繼之、

同甲辰遊了庵家、始會羅浮子、評論朱陸同異及大學綱領義、答問如響、溜澗未刻、翌日羅浮子以書示之、公有返簡、歛夫先生亦代而答之、同乙巳公受先生命往東武、見前源相國曰、丹陽與山州水路不通、疏大井川、決龜蒙麓、可以行舟、臺命曰、兩國生民之利也、宜勉爲之、丙午春夏之交、役功既成、飛芻輓粟、歲運萬石、而無升斗溺者、前源相國知公元察金氣、自丙午至己酉、巡行甲豆佐之間、令掘鑛穴、貢獻倍常、同庚戌歸帝都、于時營大佛殿于洛東、人皆艱于巨材、陸挽公進曰、我力可以致焉、時人疑之、而監司聽之、乃自伏見河至于洛東、泝而掘渠通水、相地勢高下、增修水閘、以時啓閉、而便蓄洩、凡十有餘所、懸龍車轉轆、激水過顛、大木棟梁如泛芰梗、不日運漕、見者服其智術、自是疏游淺而達洛陽、鴨河浮筏行舫、南海之魚鹽橋柚、西州之糶糴薪柴、自伏見及二條、前後相繼、移家河邊者數千戶、販夫得便、挑商安居、是曰角藏町、同癸丑公招歛夫先生於嵯峨、逍遙大井川、因絕境之景致、擬西湖之于頃、各所題名、并有倭歌、語在惺齋文集及先考碑銘、同甲寅春

富士川壅而泛濫、民人漂沒於驚濤巨浪之中、而不可踪跡、前源相國憐之、命先考治焉、先考疾病、公代之搜鑿疏導、以隨水性、自駿之岩淵、挈舟達甲府、上瀬如步、下瀬如飛、土人不經險難、永賴其利、秋七月先考病革而逝、公奔喪于京師、奉將大事、居喪盡禮、同年冬難波兵起、公管舸艦器械輜重、自京師達伏見、泛淀河而至難波、以賑軍容、又愍戰士之跋涉、令公遏水流、編扁舟作浮橋、截中島、壅長柄、設井堰、築波障、人不揭厲、馬不馳墮、後計其庸爲淀河轉運使、元和乙卯前源相國還駿城、駐轅于尾陽十餘日、尾陽者次男亞相之封國也、又賜濃州岐蘇山、以公爲巨材探運使、于今嚴昭繼焉、同年增秩補近州坂田郡吏、同丙辰四月前源相國薨、哀禮同近臣、喪畢而還京師、遣玄紀奉仕東武、今茲夏造淀河橋、歲十一月杠梁成、同丁巳後源相國改築東武城、令公採富士山材木、榱桷豫章梓檜杉、不可勝用也、秋九月還京師、讎校達德錄、又摘集明朝英賢衆作先生所未見之詩文數百篇、積成卷帙、以補先生之餘意、同癸未讓二條宅於玄紀、還嵯峨、纂言記文時或

招羅浮子玄同道圓石山木金子氏、討論古今文章、博議歷代人物、辨別異同、考訂臧否、余亦在其列、交遊益親、同乙酉、尾陽亞相公召公、講史記通鑑、讀日本書記、往還三四年、又集本朝舊記秘錄譜牒世系、命公模寫焉、家亥變形、股真亂章者、盡釐正之、元本留家、正本進之、今見在尾陽宮府、不幸而罹病疾、源公屢召不至、閉門養痾、同丁卯、讓大井川宅於嚴昭、財產頒宗族親戚、衾枕之外、無長物、唯藏書數千卷而已、卜居於清涼寺西隣、安貧樂道、非文雅之士、不敢交焉、又增註達德錄、未成全書而失明、嗚呼命哉、然而為遂素志、口授門人筆之、篇章下搜索不已、同庚午、請羅浮子、作先考碑銘、鐫石建于嵐山大悲閣、同辛未、春、擇嵐麓之勝境、構讀書堂、常與門人遊憩、春而見讀書堂之庭草、生、生知程子之意思、夏而玩期遠亭之池蓮、亭亭憶濂溪之遺愛、秋而嵐山之翻錦楓也、案上頗歎亞槐之警策、冬而西嶺之積白雪也、窓前猶燃工部之吟髭、穹壤之間、何樂加焉、同壬申三月、公臥病、召門人宗允、作訓戒、遺二子曰、我死則葬西山之麓、書貞子元之墓云、地理之書、風

水之術、以兼學之故也、六月朔、彌留危篤、輿而往讀書堂、病間則喚宗允、讀鶴林王露、理與心通、則擊節歎賞、同二十二日、病革矣、掛先聖影于枕上、備香案、奠祭器、扶起危座、燒香再拜、喚二子弟法眼、長因於左右、執手而永訣、春秋六十有二歲耳、平日著述、文章詩賦、議論和歌、數十卷、顏日期遠集、常好古詩、擇漢魏晉宋齊梁唐宋元明之作者、百人、輯古詩百首、名曰百家選、行于世、公不為崖岸、斬絕之行、與人交則雅淡、動不越思、言則順行、溫柔而事能斷、坦易而能析、翔翔翰墨之林、徜徉聖賢之城、誠博物君子也、敢錄實行、以圖其不朽焉、

寬永十年癸酉夏四月 日

法眼杏庵正意謹狀

令嗣玄紀 次子嚴昭建焉

角倉素庵名は昌字は玄之興一と稱す了以の子なり克く父の業を紹き益々其事を修む經濟に長し學を好み書を善くし文章に長す藤原惲窩より少き一歳交友最も善し早く林羅山を知り价して惲

窩に入門せしむ大阪の役徳川氏の爲に運漕を司り又舟を出し其軍を助く徳川氏特に之を賞し淀川過書船の事を委す家産益豊なり又吏務に通達し阪田郡の代官と爲り政績あり鑛山の事に通し命を奉し佐渡金鑛を検し益する所多し又安南に貿易し其國の政府と文書往來獲利巨萬文書今に存せり朝鮮人姜沆と友たり釋奠の禮を習ふ其集を期遠集といふ八十卷あり世に傳はらす元和九年六月二十二日歿す年六十二嵯峨化野に葬り遺像を二尊院に安し行狀碑を大悲閣に置く此碑即ち是也

三二

角倉素菴安南國貿易文書卷

京都市

角倉玄遠氏藏

寛永二年乙丑春正月十一日回易大使貞順子元と署せり幕命を以て其政府に交渉せし文書なり

日本國 回易使貞子元

謹啓書

安南國大監足下

會聞

主上新受

天命

興復邦國

治教休明

政令儼正去夏到

貴國之商舶蒙

厚庇歸來我國好隣之

義紀我國家之所誠感也

貴國所贈我

國主之方物達於

江戸都城撰報酬刀劔之間朝鮮人來朝以故不終修飾征帆有計裡先發商舶必來春令齋持

印章欲致誠信勿疑遲忘以此旨奏達

主上者

二國善隣之至好而已、私獻方物聊表

微誠不宣

帶劔 壹柄

大刀 貳柄

長刀 拾柄 不彩飾

硫黃

鐵

寛永二年乙丑春正月十一日

回易大使司貞順子元

三二

角倉素菴安南國政府回憑書卷

京都市

角倉玄遠氏藏

長文につき其末段と年號印形連署の部を撮影せり弘定七年とあるは安南は當時黎氏其國を領し改元して弘定と稱したり即ち我
寛永年間に當れり

三三

角倉素菴遺墨白樂天詩幅

京都市

角倉玄遠氏藏

横幅白樂天詩を草體に書せり素菴は兼て筆札に長し光悦と名を
齊ふす世に嵯峨様と稱す

三四

角倉素菴保津川八景歌幅

京都市

角倉玄遠氏藏

矮紙保津川八景の歌を書せり

三五

木下順菴顔子畫像贊幅

京都市

南大路勇太郎氏藏

紙本半截下に顔子立像を畫き上に順菴の贊あり曰く

顔氏之子、好學絕倫、博文約禮、克己歸仁、善人惟富、陋巷非貧、犯而不
校、渾厚如春、錦里木貞幹拜讚

木下順菴名は幹字は直夫又錦里と號し敏慎齋の號あり平之允と
稱す京都の人松永尺五の門に入り程朱の學を修め惟を洛東に下
し名聲海内に鳴る白石南海鳩巢芳洲の徒多く其門に出づ其成材
の多き天下桃李其門に集ると稱す將軍綱吉召して經延に待す眷
禮最も厚し元祿十一年十二月二十三日歿年七十八諡して恭靖先

生と云ふ

四十二

三六

木下順菴遺墨竝に室鳩巢尺牘幅 京都市 南大路勇太郎氏藏

順菴は元旦書懷五律二首鳩巢は伊藤齋宮に贈りし尺牘

三七

木門四大家尺牘 京都市 雨森菊太郎氏藏

四大家は新井白石室鳩巢雨森芳洲祇園南海にして唐金梅所に贈りし尺牘を集め二卷となしたり文長きを以て其末を抄す
新井白石手簡

一其元の詩材もさのみわるまけもあるましく候歟但し只今もわろく入門めされ候故とかく舊習ぬけかぬる所候て無用の事に心を用ひられ候て大水なかしに参り候所いまた心得無之と見へ候唐三百年年く及第も候て幾千萬の詩數々候事に候盛唐の作家とてわつかに指を屈し候はいかなる所故と申す所よく御料簡可有之一字一句などになやみ申すは瀛圭律髓聯珠詩格など申す類の小乗家の禪を見しもの、事に候その詩もとかく故事に

か、はり候て渾然の氣象にとほしく候桂山詩もまたそれにて候盛唐の作家一段の所に候章法の正しく渾厚の氣候所いつか見つけられ候へかすと存候故事なども引て的當し候てはやかましくも同じくは故事なしに自分のものにて事をすましたく候但し字を用ひ候と故事を用ひ候との差別も字を用ひ候か今は一句もかなはぬものに候それを詩材と申候材木を見候て相應くにとり用ひ候心得候故事を用ひ候はふるき家を引來り候て或はせはくもひろくもそれをそのまゝ取合せ座敷にし候事になる事に候書院を立關にもし居間を納戸にし申の事はむつかしくしかも不相應たるへしとかく詩の稽古はよき古詩を見分け候てすなはち古を稽ふるにて候これらの事は事も決しかたき事共に候今少しの所にて手届きかね候間御工夫存候目はよほど上り候と聞へ候此上は手の届き候所云々

一堂上乘平三〇驚の詩まつ如此候と存候いつれも十分のものとは

存せず候へども聞へぬと存し候所もなく候

一 學士詩序御うつし可給候待入候其上にて申す事御座候

一 高山詩草忝候これもまた一心の稽古に候見不申候源四へも一二冊かし申候き此人の弟子は久しく致候人有之候時々詩も見候き此たひ御頼にて多く見候むかし見候のと別にかはりし事もなく候歟まつこれ位に候へし當時此國相應の詩人とも申すへし但し丈山元政など○○○○たれもすまじきほどの作者にて候き轉し薄くこそ候へ元政は近世の詩人にて候はん歟しほらしき所候き文は重光師詩は元政師儒家にこれほごなれ候も見へ來らす候御申入ことく僧家には其人も候そなたさまにはいか、存せられ候但し僧家の詩文もとよりその風格ある事ながら手に入り候所を申にて候や、ほん色にて殊勝に候にせものには大きうすぐれ可申候今からこのこと風にあひ候はぬ○○○とて評し候は抑末なる事に候歟

一 今一封ようぞ御申こし候きのとくなる事に候處まつかたつき候て此上の事に候人欲と申すものに候愈巧にして愈拙き事のみ不及是非候但しいつくも同し秋のくれに候似たるか心ねにこそあれ高きもいやしきもなか／＼同し類たると存候をのれ一分は利し候はんとて毒流しをる事いかなる心に候歟○○○○○畢竟初心なる人と申へし出舍風と申へしその病根不學無術にて候私智をたのみ人を欺き候ことに候莊子のわるくちよまれ候も如此事のためと存候事に候

(○ハ文字不明以下之に準ず)

四月晦

花押

梅所様へ

新井白石名は君美字在中初名は勘解由と稱す江戸の人木下順菴の高弟也其學術經歷世に著しければ委しく記せず其學術は宋學にして活用を主とし古今に該通し治亂に明かに經綸の用あり國史學の生面を開き後來の模範となり洋學を始め西洋の事情に通

し文詩清雄雅兼て國文を能くし曠古の碩學たり徳川家宣に用ひられ從五位下筑後守に叙任し大政に參す家宣薨するに及ひ致仕専ら著述に從ふ享保十年五月十五日卒す年六十九其著書百六十餘種皆有用の書なり其題肖像七絶亦其人を見るへし
室鳩巢尺牘上略

一二月八日の來書右の義候以後に到來是又致拜見候殊に其地名産こつみ煙草一箱竝園中嘉菜の名物七種入一桶預惠御厚意不洩思存候別而煙草は病中慰に供し殊外風味勝れたる不捨置致賞味事に御座候遠境思召寄候事不堪感謝候

一和字御筆録の一冊被遣爲御見珍重存候殊御詠歌も毎篇の末に相見候別而握翫の事に候愚老の序御望の由唯今老衰太く迫病屈候故著述は一向廢候而何方へも及斷候へ共貴様義と申遠方御越の事候へは病氣快成候へは短篇成共相調進可申尤も御詠は武者烏丸の兩卿も御點削の事候間其義も序中に書入可申旨得貴意存候

右之仕合に候間急々には難調候御筆録の物は追而可致返進候今少留置申候手痛候而かやうにもやうく調申體に候其故早々及御報候其元より數通の御狀到來殊年始の賀狀も有之候へ共此方よりは一書にて申入且又半紙にて賀狀の御報も申進候事旁略義の至に候へ共可預御宥恕候尙期後音の時候恐惶謹言

三月十一日

室新助華押

唐金總左衛門様

室鳩巢名は直清字師禮新助といふ江戸の人木門の高弟なり爲人忠實篤敬最も經義に深し初め加賀前田家に聘せられ白石幕府に用ひらるゝに及ひ推薦して幕府の儒員となる家宣薨し白石致任する後將軍吉宗に重用せられ侍講となり顧問に備はる享保十九年八月十二日歿す年七十七著書甚多し

祇園南海手簡上略

右之通近年打續公務浩穰故世上の頼事一切斷候而隻字も認遣不

申候へ共貴亭久々にて預屬托候儀難默止存候間一篇を進呈致候
左様思召可被下候右繪圖は依之留置候兩書令返璧候

一如諭白石君物故候事御同意不堪慟哭候當年は舍弟竝弊門人等東
都に祇役雨森氏にも西上同前の通路有之白石の事も早く承候へ
共扱々當春迄は公務蝟紛人事を廢棄誠に隔世の人の如く暮し候
き又來春よりは匆忙之身に罷成候其御元にも近來御病身為御保
養學問も御止被成候由御尤に存候先々御氣體御保齋之儀專要存
候然は從會津與御頼被成候由にて徜徉亭十境之内一題愚作を綴
可申旨委細御紙面竝彼方兩通の書狀及繪圖一枚致熟覽成程安き
間候儀致承知候遠境望冥候斗に候吊哭も不得致千萬惋惜之至存
候彼公御存知之通當世之麟鳳にておわし候處千古の人となられ
候事天意今更無信候哉と存候心事猶期後音候恐惶謹言

九月十六日

唐金喜左衛門様

祇園餘一華押

御披

祇園南海名は瑜字は白玉餘一と稱す紀伊の人木門の高弟白石鳩
巢芳洲等と名を齊くす其詩才海内に鳴る兼て畫を善くす南畫の
祖と稱す寶曆元年九月八日歿す年七十五

雨森芳洲手簡上略

白石翁が申參候趣も一々承知仕候貴様御作四五句の外は不殘圈
點被致候由左様御座候得は珍重の御事に奉存候白石翁引立の心
持も可有之哉に候被仰下候必々左様被思候間敷候御挨拶にもみ
たりに圈點は加かたき御事にて御詩卷の内秀拔の所有之候故に
こそ圈點も致たる事に御座候へは彌以御はけみ被成不被捨置御
修鍊可被成御事に奉存候先以學問上の御吉事承り候て珍重に奉
存候事に御座候信使も最早順風次第渡海の筈に御座候此間は南
風打續申候故於今其義無御座候へ共餘り間も有之間敷候故來月
は罷登り其地に而可得御意候三使學士書記の姓名書附懸御目候

て内々御頼み物も何角船中に而出来候様にと存候得共閑暇可有御座候哉油断は仕間敷候間御氣遣被成間敷候且又先頃書肆々借來候醉菩提四冊頃日點あしく見へ候所皆々直し申候故指登申候間御届被成可下敷下地殊外點惡敷御座候故随分直し候とは存候へ共また餘程残りも所○○○○其旨彼方被仰達可被下候此書の分は私義も一部寫申度奉存候何とそ貴様御世話に而○○○御頼被下一部御寫させ被下候は、忝奉存候あまり心なき御無心の儀に御座候へ共其邊には書手も多く可有御座候不願煩讀如此御座候若も成申義に御座候は、すきうつしに被仰附可被下左無御座候へは落字誤字等必有之候事に御座候歡喜○○私罷登り候節持越可申敷此段も御傳へ申成可被下候松浦儀門方の御傳言其儘聞候當時朝鮮表々いまた歸り不申候間三使同前に歸着いたし候節可申達候世倅義も預御傳言忝奉存候由申候千萬近々期長日可申上候恐惶謹言

六月十四日

雨森東五郎

唐金喜左衛門様

俊良華押

雨森芳洲名は俊良字伯陽東五郎と稱す平安の人或は云ふ伊勢の人木門の高弟にて學成り對馬宗家に仕ふ唐韵清韓語に通す白石と國號を論し議合はす書を作りて之を争ふ用ひす世多く芳洲を是とす學を好み老て倦ます八十一にして歌に志し古今集を誦する一千遍自から歌萬首を詠す寶永五年正月五日歿す年八十八

三八

祇園南海遺墨幅

京都市

南大路勇太郎氏藏

紙本半切一行元享利貞四大字

三九

貝原寬齋送篤信序文稿幅

愛宕郡大宮村 高見祖厚氏藏

寬齋名利貞福岡の人にて益軒篤信の父也益軒篤信初め公命を奉し修學に出つる時寬齋の興へし送序なり余送之洛之東郊とあれは此時父子ともに京都にありしを見るへし全篇戒懼の二字を以て骨子と爲し勗むるに忠孝を以てせり益軒一生の學業其父の訓

戒より成れるを知るへし

篤信序

寬齋華押

君子之心常存戒懼、雖不見聞、亦不敢忽而已矣、苟無戒懼之心、凡事皆妄作、必招敗亡之禍、蓋自周末文勝學者、溺於浮華奢泰之習、務利達功名、而無戒懼之心、世道日崩、士風日衰、薄子、思子、憂當世之學者、陷溺於流俗、故曰、君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞、余常以成訓、銘心鏤骨、反復講習、亦以示篤信、夫篤信性質遲鈍、朴實、無良平之智、無儀秦之辨、不執抱樹號猿之技、不狃鳴劍抵掌之術、自幼未嘗遠遊、常在慈母膝下、定省之暇、略讀經史、填靡相和、講論商議、而未能審問、慎思、以精美義理、真千尋之一滴、萬仞之一塊、不能無存半途而廢之悔也、縱此而卒業成功、則庶乎為國家之用矣、今秋辱蒙嘉命、將赴○○邸、余送之洛之東郊、方欲分袂、篤信謂余曰、今茲將遠去、敢請今言、以為夙夜勗、余平素示汝戒懼之外、無復有他說也、汝心常存戒懼、則事君忠、執事敬、而能免敗亡之禍、無貽慈母之懼、且又得見錦歸之

榮、詩云、嗟予季行役、夙夜無寢、上慎旃哉、猶來無弃、其戒懼之謂歟、行矣勉諸、

貝原益軒名は篤信字子誠又損軒と號す久兵衛と稱す福岡侯の世臣父を寬齋といふ年十八京に入り山崎闇齋松永尺五木下順庵を師とし研究怠らす専ら程朱の説を守る其學說平實淳正にして易行なり其著書多く國文を用ひ俗を化するに易し醫藥種樹工藝養生百科に兼通し各々其著書あり名勝故蹟を探り海内に遍く著書甚多く最も世に益せり正徳四年福岡に歿す年八十五

四〇

貝原益軒墨跡一行物幅

京都市

熊谷直之氏藏

紙本半切行書大字安外無求唯寡欲八十四翁益軒貝原篤信書

四一

貝原益軒墨跡格言幅

京都市

藤崎虎二氏藏

紙本横物草書天地有萬古此身不再得云々八十五翁益軒書

四二

貝原益軒墨跡格言幅

京都市

神田喜左衛門氏藏

紙本横物涵養須用敬進學則在致知篤信書

四三

仲村惕齋肖像幅

愛宕郡修學院村圓光寺藏

紙本全幅唐巾深衣立像の上に小切れの自賛絶句を貼附せり此賛は先哲叢談の傳にも出したたり

仲村惕齋名之欽字敬甫七左衛門と稱す京都の人重厚貞毅名利を厭ひ門を閉ち道を講し博學洽聞曉通せざるなし宋學を尊信する最も篤く誠敬自ら律す德望甚高し伊藤仁齋と名を齋くす最も女教を重んし女鑑三十卷を編す其他著書甚た多し元祿十五年七月二十六日病歿年七十四儒式を以て圓光寺山上に葬る今に現存せり

四四

松下見林神代卷直指抄奥書

愛宕郡上賀茂村別雷神社藏

今井似閑上賀茂神社奉納書籍の内也寫本二冊にして其末に松下見林の自筆の題文あり見林の遺墨を搜索せしも他に得ざりしを以て之を掲けたり

直指鈔跋

直指秘傳鈔者相傳出自和州石上神祠蓋爲物部氏所傳歟余始得數卷其說頗有理致源委以示延佳神主延佳嘉歎以爲神授故講述鈔往々引之其後歷數年亦得全部今井圓雄從余學日本書紀故際寫之閱之不止需余書其傳來故加一言於卷末云爾

貞享元年孟夏穀旦

在判

松下見林名は攝慶字は諸生西峰山人と號す浪華の人京に入り堀川下立賣に住し醫を業とす學問該博最も國典に力を盡す考證修訂する所甚た多く藏書十萬卷に及ぶ老後高松侯に祿せられ京に居て専ら講學に従ふ延寶中所司代戸田忠昌其學德を重んじて奏して法印を授けんとす見林其否を論して受けず元祿十三年十二月七日堀川に歿す年六十七下立賣大雄寺に葬る見林深く山陵の荒廢を慨し前王庶陵記を著はし考索する所多し此より山陵修理の説起る明治三十年四月其功を追賞して從四位を贈らる其子見樸克く家學を繼ぐ

四五

柴野栗山本佐錄序稿竝尺牘幅

京都市

山本復一氏藏

五十六

此書は本佐錄の序を山本中郎の爲めに草し其事につき中郎に寄せたるものなり本佐錄は本多佐渡守正信か東照公を佐て天下を平定したる事を記したるものにて中郎か校正出版せしを栗山文を書て其書を序し併て其校正の事竝に樂翁公田安家其他當時有名の人に贈與する事を通せしものなり序文は栗山文集に載せたり

栗山名は邦彦字を彦輔氏は柴野讚州高松牟禮の人也初め後藤芝山に従學し昌平校に入り林家の高弟にて學識一世に秀つ阿波侯に聘せられ後幕府の儒員となり白川樂翁公を助け大政の顧問たり程朱の學を主とし異學の禁を立て全國學風を一定す殊に皇室を尊ひ大に皇居復舊に力を盡し又山陵の荒廢を慨す神武陵の詩は人口を喟炙せり文化四年十二月一日歿す年七十四所謂寛政三博士の首なり

山本中郎は封山と號す亡羊の父なり學を好み詩文を嗜む栗山と友たり

四六

柴野栗山格言書幅

徳島市

渡邊勝三郎氏藏

紙本全幅行草書

四七

中井竹山上大執政源公詩幅

京都市

南大路勇太郎氏藏

紙本横物行書大執政源公とは白川侯松平原定信なり此時候一世の利器を以て將軍を佐け大に政務を擧げんとし親しく要地を巡視し其大阪に至るや特に竹山を延見し其講義を聴き且時務を詢ふ竹山乃ち當時の要務を論し之を上る即ち草茅危言也侯大に之を感賞す當時學者門戸を競ひ文藝を賣る然るに竹山常に天下の事に心を用ひしを見るへし此詩は其時に上りし者にて其買生を以て自から任するの抱負を見るへし

中井竹山名積善字子慶善太と稱す大阪の人登庵の長子弟履軒と五井蘭洲に従ひ厚く宋學を奉し大に活用する所あり時勢に通じ

五十七

經濟の略あり松平定信大阪を巡視するや延見講を聞き且時務を問ふ竹山草茅危言を作り之を上る又逸史を獻す賞賜あり諸侯之を聘すれど應せず登庵懷德書院を建て三宅石庵を請ひ之か主となす竹山後之を受け學者益々進む竹山卓犖偉力あり有爲の奇才なり文化元年二月二日歿年七十五諡して文惠先生と曰ふ著書甚多し

四八

中井履軒五言聯句幅

京都市 南大路勇太郎氏藏

紙本全幅大字草體にて梅花を詠せし對句を書せり

中井履軒名積善字虔叔德二と稱す竹山の弟兄と名を齊くし一世に鳴る其學宋學を主とするも俗達拘泥する所無し別に一機軸を出す姿貌器宇一世を睥睨す文化十三年歿年八十五著書甚多し

四九

蒲生君平過會津絶句幅

京都市 廣田金兵衛氏藏

蒲生君平名秀實又名夷吾修靜庵と號す下野宇都宮の人氏郷の遺裔といふ嘗て時事を慨し海内を周遊し豪傑に交り古に稽へ今に

徴し之を経綸に行ふの志あり今書を著はし時事を論し不恤緯を著はし外患を論し職官志及八志を著はし王政の要を論し殊に山陵荒廢を慨し山陵志を著はす一生心血全く尊王に盡す此詩は會津を過き氏郷の舊事を懐ひて作りしもの也

五〇

皆川淇園肖像幅

南桑田郡龜岡町皆川惇氏藏

絹本全幅著色社衿着用端座の肖像也

皆川淇園名愿字伯恭文藏と稱す又節齋有斐齋の號あり京都の人經學文章を以て一時に鳴る最も易に長す一家の學を立つ書畫を善くす其弟富士谷成章と竝ひ稱せらる公卿諸侯門人甚多し著述最も富み公行せしもの、外遺稿家に存するもの數十部多く其手稿に係れり文化四年五月十六日歿す京都阿彌陀寺に葬る

五一

皆川淇園墨跡幅

南桑田郡龜岡町皆川惇氏藏

紙本半切草體にて作文の説を書せり是は淇園の文章に對する意見なり

若槻幾齋開口謠竝遺稿示肄

京都市 兩足院藏

文政元年仁孝天皇御即位始め御能の行はれし時獻りし開口謠なり其謠國體を明かにし朝廷を尊ひ其志の在るところを見るへし是は幾齋か自から書せしもの也外に賞狀あれと之を略す示肄は整本一冊あり其學術修道の要語を漢體に記したるものなり僅に十五葉なれと其學力性行を見るへきもの也

示肄

若槻 敬 述

天無爲而使聖賢立綱常、天無言而使聖賢垂教誨、善學聖賢之學而遵其道、所以順天也、

觀覽聖賢之書、當如躬親進見、請問而敬承其教誨、承焉而不違、勤焉而不忘、緘焉而不斷、樂焉而不能、則使應有所必得矣、
爲學、必須要其知之真、而其行之實焉、知之真、則行可踐、而修焉、行之實、則知可擴、而充焉、知真而愈真、行實而愈實、進退不容已矣、

開口謠

それ久堅の、天照す おほん神より 傳へます
天津日嗣は 彌増に 榮わくして 天地と
ともに盡せず光そふ 聖の道も 明らけく
いく萬歳 動きなきやまどもろ人 なす業も
安く楽しく 所得て 愛かりける
御代とかや

若槻幾齋名は敬字は子寅又寛堂と號す大阪の人幼より聰明學を好む京に入り西依成齋に従ひ厚く程朱の説を奉す隱居して仕へす帷を下して教授す恬靖自修當世に阿らす幕府特に其學行を褒し賜金あり頼春水小澤蘆庵等と相親しむ好みて歌を詠す仁孝帝の即位の歳御能の開口の謠を獻し旨に稱ひ特に金圓を賜ふ平生心を四書に用ひ四書集註翼及四書章句解を著はす文政九年歿す年八十一烏部山に葬る日記詠艸示肄讀書録兩足院に在り

五三

頼山陽拜延曆陵絶句幅

京都市

熊谷直之氏藏

頼山陽名襄字は子成久太郎と稱す安藝の人春水の子去りて京都に住し水西莊を三本木に構へ此に居る天保三年九月十三日歿す年五十三東山長樂寺に葬る山陽の事蹟は世に著しく遺墨も甚多きを以て今其拜桓武陵詩一幅を出す近年特旨を以て正四位を贈らる

五四

渡邊華山遺墨額面

京都市

熊谷直之氏藏

渡邊華山名は定靜字は子安又伯登といふ登と稱す三河の人少にして大志あり儒學に通し兼て洋學を修め又畫を善くす天保の季年外患漸く迫る華山時勢を察し深く之を憂ひ高野長英等と計畫する所あり幕吏の爲に忌まれ構陷する所と爲り天保十二年十月十一日自刃して死す年四十九

五五

中村栗園肖像幅

京都市

中村和光氏藏

紙本全幅著色七十一歳の時門人神川信近に寫さしめ自から贊せ

しもの也

中村栗園名は和字子藏豊前中津の人若きより刻苦研究學成り水口侯に聘せられ學事を督す要職に任せられ勤儉を尙ひ義勇を勵まし學を奨め武を講し風化大に行はる國事多故水口天下の要道に當り能く其滯務を盡したるは栗園の力なり維新變革の際急に京都に入り藩主を助て設施する所多し明治十一年車駕北陸に巡行するや特に召して謁を高宮驛に賜ふ栗園其著孝經翼を獻す特に絹帛を賜ふ蓋し異數なり明治十四年十二月二十日歿年七十六手澤の唐本四書あり記入滿帙其好學の厚きを見るへし明治三十六年十一月從四位を追贈せらる

五六

中江藤樹先生肖像幅

葛野郡衣笠村

福井成功氏藏

紙本中幅淡彩此像は藤樹の高弟淵岡山(通稱源右衛門藤樹の高弟にて熊澤蕃山の先輩也京都に住す儒を以て業と爲し累世に及ぶ)京都上京一條葎屋町に帷を下し教授す邸内に祠堂を立て藤樹を

祠る是は其祭りし所の像也後祠堂廢し福井氏に歸せり藤樹の肖像として最も著しき畫なりと云ふ

中江藤樹名は原字は惟命與右衛門と稱す近江國高島郡小川村の人なり父は祖父に先ちて死す藤樹幼にして祖父に附き其主加藤氏に米子に従ひ又大洲に移る一日大學を讀み感ずる所あり研苦講學程朱の説を主とす藤を棄て、郷に移り母に侍す中年王陽明の説に服し實踐躬行學徳一世に高く稱して近江聖人と云ふ風化郷國に行はる門人頗多く熊澤蕃山最も著はる慶安元年八月二十五日歿す年四十一第三子常省其業を繼く明治四十年其學徳を追崇して正四位を贈らる

五七

中江藤樹先生墨跡幅

京都市

杉浦三郎兵衛氏藏

紙本横物無款知止の大字を書し次に楷書にて其説を記したり

五八

中江藤樹先生墨跡幅

京都市

長尾時春氏藏

紙本中幅無款草書にて志の大字を書し側に其説を記したり

五九

中江藤樹先生墨跡幅

滋賀縣

淺見安左衛門氏藏

紙本中幅無款楷書にて道の大字を書し側に草書にて其説を記したり

六〇

藤樹書院舊圖卷

滋賀縣

藤樹書院藏

書院火災前の舊圖にして卷首に左の記事あり寶曆九年分部清興と云ふ人の記せしものなり頗讀難きも參考となるべきを以て全文を掲ぐ

西湖近州高島郡上小川之邑

藤樹先生名者中江與右衛門諱者惟命暉軒與と號す慶長十三戊申之年三月七日於同邑老藤樹之下降誕ス萱堂者同邑北川氏徳右衛門農士之女而先生九歳之時被育于外祖父北川氏矣于時豫州大洲之領堞加藤之姓羽州城侯耳任務ス先生二十七歳而爲於實妣孝育產地小川之舊土爾歸邸セリ後慶安元戊子之年秋八月二十五日於產地小川之邑講舍亡卒シ玉フ享齡四十一紀墳墓在

于同邑玉林精舍之境地矣

嫡 童名虎之助後中江太左衛門冥伯ト號ス

先生元子女產生闕乏スト云爾

仲 稚稱鍋之介後中江藤之丞仲樹ト號ス

末 中江彌三郎季重又江西文内後常省先生ト稱ス寶永六巳

丑之年六月二十三日亡ス壽六十四歲墳墓藤樹老先生一

園ニ在リ

三女ヲ產生ス母堂者前之備陽之大侯家長谷川勤士之女也三女之嫁娶夫々配偶セリ暫缺之

右三士俱備之前陽之大侯少將源光政松平本姓池田氏新太郎城

君爾被奉仕云爾

昔 寶曆第九舍于星竜巳卯之仲夏下院資伴而夷而爲家珍與

釣寂之隱人藤姓分部氏清興欽而誌置之訖云

次に邸地と建物圖を寫し其次に建物の平面圖を寫し其間取墨數

等に至る迄細に記したり

六一 中江常省藤樹書院規約卷

滋賀縣 藤樹書院藏

藤樹書院の揭示にて其規約也常省の藤樹先生の跡を繼ぎ書院を督せし時之を定めて自から書せしもの也

中江常省藤樹の第三子季重彌三郎ト稱し後江西文内ト改む父藤樹の學を承け藤樹書院を督す寶永六年六月二十三日歿す年六十四

六二 中江常省墨跡幅

滋賀縣 淺見安左衛門氏藏

紙本小幅無款楷書にて徳の大字を書し側に其説を記したり先に記せし藤樹先生の道の解と雙軸なり其文に曰く

人之爲徳也剛健中正純粹精而神妙不測、虛明昭々然、通天下之故、是以無發而不中節矣、今也爲不善人、欲害之也、雖然是明不可掩、若能擴充其端、而克己復禮、則德斯立焉、活潑流行、無不盡其道矣、謂之明明徳、

六三

熊澤蕃山尺牘幅竝短冊

京都市

富岡鐵齋氏藏
南大路勇太郎氏藏

緊紙にて北小路石見守様次郎八とあり、硯を贈らる時の書也、蓋再度入京貴族に優待せられし時のものなるへし
短冊は無題にて嵐さへ云々

熊澤蕃山名伯繼了介と稱し又次郎八といふ京都の人藤樹先生に従ひ陽明學を學ひ刻苦研精其業を成す備前芳烈公に重用せられ大に政績を擧ぐ名譽海内に鳴る年三十九公に請ひ致任して京に歸る公卿道を問ふもの多し偶々讒者あり之を處々に避く到るところ敬待甚厚し後封事を幕府に上り天下の大政を論す將軍綱吉之を惡み命して古河に禁錮す元祿四年八月十七日歿年七十三蕃山一世の碩儒經國の大才を以て其用を果さすと雖ども今に至るまで經綸の偉器を擧ぐれば人皆先づ指を此人に折るといふ

六四

三輪執齋尺牘

京都市

雨森菊太郎氏藏

正月二十三日附にて和田八郎兵衛様三輪執齋とあり

三輪執齋名は希賢字善藏父を澤村自三といふ京都の人佐藤直方に従ひ闇齋の學を承け後陽明學に入り藤樹を慕ひ學を其跡に講す聞くもの感泣して藤樹の再來と爲す德望甚盛なり又和歌を善くす寛保四年正月二十五日歿す年七十六建仁寺中兩足院に豫め壽藏を作り自から歌を題す曰くたらちねにかへす此身もおくつきおしるしとをみる杉の二本契りおきたまの有かをこゝに見よからはいつくの土となるとも歿するに及び門人此に葬る

六五

春日潛庵漢體尺牘卷

京都市

春日仲精氏藏

老後の墨跡にて其門人河野亮か重病中に與へしもの也亮は三十餘年の舊門人にて學業既に成りしか不幸にして病に罹りしを以て之を慰問し且大に励むる所ありしもの也短篇と雖も其學植を見るへし

春日潛庵名は襄字は子贊久我家の諸大夫にして従五位下讚岐守と爲る早く餘姚の學を修め備中山田方谷但馬池田草庵と名を齊

くす門徒頗盛んに薩藩士多く其門に入る又經綸の材あり久我家の家政を匡す屢々罪責に罹るも屈せず維新の初奈良縣令と爲り俄に獄に投せらる既にして宛白す此より平野に閑居し道を樂しみて出てす西郷隆盛と深く相知る其晩年書を鹿兒島に贈りて勸めて上京事に當らしむ西郷亦意見十二條を書し遠く相詢れりといふ明治十一年三月歿す年六十八鳴瀧法藏寺に葬る明治三十二年十一月十三日特旨を以て正四位を贈らる

六六

池田草庵墨跡幅

京都市

大森鍾一氏藏

紙本中幅程伯淳七律を書きたり草庵陽明派の學者にして此詩を書したるは必ず程子に心服せるを見るへし

池田草庵名は禎藏字は子敬但馬の人苦學成業京に出で松尾に寓する數年春日潛庵と深く相契合す後但馬に還り書堂を宿南に築き青谿書院といひ記を作りて志を示す四方學徒之に歸す業を成すもの頗る多し

其内にて北垣國道男爵久保田讓氏同貫一氏井上光男爵原六郎氏等最顯はる明治十一年九月二十四日歿す年六十六

六七

伊藤仁齋先生肖像幅

京都市

伊藤重光氏藏

伊藤仁齋名維楨源佐と稱し古義堂と號す京都の人父を長勝といふ寛永四年堀川の邸に生る大に古義を唱へ門生海内に遍し其學術道德は世の普く知る所也寶永二年三月十二日歿年七十九小倉山に葬る古學先生といふ門人北村可昌碑銘を作る近年其學行を追賞して正四位を贈らる五子あり皆世に顯る源藏東涯長胤重藏梅宇長英正藏介亨長衡平藏竹里長準才藏蘭嶋長堅所謂伊藤の五藏也

六八

伊藤仁齋先生墨跡幅

葛野郡衣笠村

福井成功氏藏

紙本横物行習二大字蓋し額面なるへし

六九

伊藤仁齋先生墨跡幅

葛野郡衣笠村

福井成功氏藏

紙本横物日札三章

七〇 伊藤仁齋先生墨跡扇子

京都市 南大路勇太郎氏藏

貼金大扇子、曰く名所海、與謝の海にあればこそめてれ橋立や宮こもなせは人もすさめし維楨、外に落花寂々啼山鳥、思往事、新樹風、春野の四首を書す尾に寛政丙辰之夏善詔審定爲書とあり、仁齋の遺墨を其孫善詔の審定せしものなり

七一 伊藤東涯肖像幅

京都市 伊藤重光氏藏

伊藤東涯仁齋第一子、愿藏と稱す、又慥々齋と號す、能く家學を繼ぎ大に其道を弘め、堀川の學派海内に遍し、其學行世の普く知る所なり、元文元年歿年六十七、紹述先生といふ

七二 伊藤東涯墨跡幅

葛野郡衣笠村 福井成功氏藏

紙本半切大字行字書、發憤志食の四大字

七三 伊藤東涯墨跡幅

葛野郡衣笠村 福井成功氏藏

紙本全幅行書和壁、非至寶云々

七四 北村篤所筆說文稿幅

京都市 北村勉三氏藏

紙本横物、岸和田太夫某氏の爲めに作りし所の筆說の稿本也、

北村篤所名は可昌伊兵衛と稱す、近江國野洲の人、京都に住す、伊藤仁齋に學ひ、其高弟たり、學德甚高し、朝鮮國使と應酬し、使人其才學を稱す、靈元上皇其名を聞き、北面の家名を繼かしめ、宮中に召さんとし給ひしも、應せず、特に儒服を給ひ、經を仙洞に講せしめ給ひ、御硯人參等の賜あり、仁齋歿するや、其碑文を作れり、享保三年七月十一日歿す、年七十二、黒谷山に葬る

七五 北村篤所墨跡幅

京都市 北村勉三氏藏

紙本横物、妙法院宮にて作りしもの

七六 並河天民探幽畫楠公像贊幅

京都市 並河總次郎氏藏

絹本小幅、下に探幽筆、楠公甲冑の像あり、天民の四言八句の贊あり、無款、天民の後裔の寶藏する所なり、並河天民名は亮字は簡亮、京都の人、父を儉齋といふ、兄五一、誠所と伊藤仁齋の門に入り、其學を修む、更に考究する所あり、自ら一機軸

を出す仁齋の歿後門人東涯に屬するものと天民に屬するものあり天民志氣豪爽識見高邁時流に抜く東涯曰く天民は六尺の孤を托し難しと天民之を聞て曰く余は人より奪ふは知らず人には奪はれし東涯は人より奪はすとも人に奪はるゝを知らずと經濟の略あり上書して蝦夷を開拓して内屬せしめんと請ふ亦兵機を知り音樂に通し醫術を知り兼て和文を善くす享保三年四月八日歿年四十清閑寺に葬る人皆之を惜む

七七

物徂徠先生肖像幅

京都市

熊谷直之氏藏

絹本豎幅平服端座机に對し觀書する所

荻生徂徠名は双松字は茂卿姓は物部因て物茂卿と稱す通稱總右衛門江戸人父下總に謫せらる徂徠幼にして之に隨ひ苦學研鑽初め宋學を修む二十五赦され江戸に歸り帷を下す柳澤氏に聘せられ大に重用せられ五百石を食む年四十九古文辭學を修め新説を立つ門人甚多く其說禮樂を以て道とし道を以て聖人の作爲に出

七八

物徂徠墨跡幅

京都市

南大路勇太郎氏藏

紙本半切草書七絶莊周に題せし詩也

七九

山崎闇齋先生肖像幅

京都市

出雲路通次郎氏藏

垂加流の會津地方に弘まりしか爲め此の像も其地に在りしを近年模寫奉納せしもの、由

山崎闇齋名は敬義嘉右衛門と稱す京都の人初め妙心寺に入り僧と爲る獷悍無賴衆僧之を逐はんとす去りて土佐に至り谷時中野中兼山に従ひ其學を承け佛を去り儒に歸し還りて京都に教授す門生大に進む後會津侯正之に招かれ大に重用せらる正之薨し又京に歸り名聲益々揚る後神道に歸し所謂垂加流を創む於是門人離畔するもの多し天和二年九月十六日歿年六十五黒谷山に葬る

門人佐藤直方淺見綱齋三宅尙齋最も顯る其神道は玉木葦齋等之
を傳ふ祠を下御靈社内に設けて垂加社といふ垂加とは神垂以祈
禱爲先、冥加以正直爲本の句に取れりといふ近年其學術を追賞し
て正四位を贈らる

八〇

山崎闇齋先生考妣壽像幅

京都市

出雲路通次郎氏藏

絹本横幅對座畫は土佐將監光起の筆にて著色其上に闇齋の題文
有り曰く乾父坤母一視同仁家君壽影於我最親山崎嘉謹贊

八一

三宅尙齋肖像懸額

京都市

山本臨乘氏藏

美濃國に傳來せし肖像を臨せしものなり

三宅尙齋名は重固儀右衛門又丹治と稱す播磨の人山崎闇齋の高
弟にて淺見綱齋佐藤直方と名を齋くす阿部侯に任ふ元祿中將軍
其邸に臨む尙齋旨を奉し論語を講す時服を賜ふ其職に在る正直
屈せず遂に爲に忍に幽閉せらる獄中血を以て狼毫録三卷を著は
す後京都に帷を下す墓は黒谷金戒光明寺内に在り

八二

三宅尙齋質好說文稿幅

京都市

南大路勇太郎氏藏

尙齋の外姪岩崎氏の爲に作りしもの也

余之外姪岩崎某、嘗從學於綱齋先生、先生名之以質好、比日請予以
書其說、先生名之也、取於論語質直而好義之語矣、蓋質朴忠直無徇
外者、道之本也、行己處事必以義者、道之用也、本則守而後立、用則學
而後達、然其守其學、不外於親其親長其長妻其妻子其子之間、而可
得之於愆忿塞愆悔非改過之功而已、吾子勉勉於此而不已、則今在
先生沒之後、而庶或得不負先生存之訓、若其不然也、對於先生在天
之靈、可耻矣、可畏矣、

正徳甲午歲九月二十九日三宅重固識

八三

淺見綱齋遺墨幅

京都市

南大路勇太郎氏藏

紙本全幅敬の大字を書す

淺見綱齋名は安正通稱重次郎綱齋は其號也又望南樓と號す近江
の人山崎闇齋に従ひ其高弟なり佐藤直方三宅尙齋と名を齋くす

忼慨忠烈深く時勢を傷み大有爲の志あり諸侯の召に應せず靖獻遺言を編し其志を示す武技を善くし其佩刀の鋸に赤心報國の四字を刻す正徳元年十月朔歿す年六十鳥部山に葬る後來尊王報國志士觀感興起せしもの少からず

八四

下河邊長流和歌色紙幅

京都市

廣田金兵衛氏藏

玉かつらハふ木あまたの、ちもみよもとの岩根はうつらさり
けり長流

下河邊長流名は貝平彦六と稱す大和の人難波に閑居して古學を娛しみ萬葉集を好み詠歌の體を古風に復する基を開らきたり人格高潔苟も世と合はず水戸義公の求めにより萬葉集の註釋を作らんとして未だ成らずして歿す時に貞享三年六月三日卒年六十三國學の首唱は實に此人にあり

八五

荷田春滿大人肖像幅

紀伊郡深草村

羽倉信義氏藏

絹本全幅彩色下に狩衣の座像を寫す是は東京の別家に傳來せし

を模せしものにて上に稻荷神社宮司近藤芳介の題字あり曰く

敷しまの大和にはあらぬ唐鳥のあとを見るのみ人の道かは

こは贈正四位荷田大人の御歌なるをおのれかきてよとある
まゝにおほけなれどかこみくもしるす明治二十七年

二月從六位稻荷神社宮司近藤芳介

荷田春滿本姓羽倉氏稻荷神社祠官正五位下信詮の第二子兄を信友と云ふ家を繼ぐ春滿名は信盛後に春滿に改む一に東丸又東麻呂に作る一定せず皇國學の不振を慨き壯年江戸に出て刻苦研修當時未だ師承すへきなく備に心力を盡す居十五年業成り家に歸る後更に江戸に上り益益講學に力む其志一に古道を明にし大義を正すにあり幕府諮問する所多く古書の收藏概ね其檢定を待つ擢用せんとするも辭して應せず一に著述に従ふ先是下河邊長流契沖河閤梨古學を唱へしも未だ成らず東麻呂に至り克く皇國學の基本を立て門人賀茂眞淵之を承け益々闡明して其業を大成せり故に學者推て皇國學の祖

と爲す會て國學校を京都に建てんとし啓文を幕府に上る事行はれんとして其病の爲に果さず其啓文世に傳り實に國學校の首唱たり元文元年七月二日歿す年六十八稻荷の阿里山に葬る姪在滿を以て嗣となす克く其業を繼ぐ明治十六年特旨舊功を追賞し正四位を贈らる同年五月允許を得て其靈を祠りて神社を建つ事聞す特に金若干を賜ふ其後府社に進めらる遺稿三十餘種猶家に藏す

八六

荷田春滿大人尺牘幅竝自筆遺稿の内

紀伊郡深草村

羽倉信義氏藏

徳川幕府奥祐筆下田幸太夫に答へし尺牘案の一なり幕府春滿の學術を重んじ下田等をして種々諮問する所あり又圖書の審査を命し其賛可を以て收藏する事となれり故に下田に答へしは幕府の諮問に答へしなり其案數十通にて二大卷をなせり皆長文にて此に載するを得ず其最も短きものを收む曰く

一神武紀自天祖降跡以逮于今一百七十九萬二千四百七十餘歳と有之候年數は道理に有之哉否所存可申進旨被仰下候世俗神道者流の説には道理被立候義も可有之候哉不存候唯上古以來傳來の年數を於神武紀被載候までの義と見申り仔細の道理も不承を正義といはし候曆數家などにも古の年數の事古來いまた沙汰を不承候瓊々杵尊火々出見尊葺不合尊とその三代は山陵も於筑紫鎮跡有之道理と一般にて天祖降跡已來の年數も無之ては正統帝紀のしるしも虚に似候故於神武紀傳來の年數を被載候義と御心得可被成候於神代卷年數を不被載於人皇紀被載候事殊勝の義と存候親房の神皇正統記三代治世の年數委く被載候事日本紀の趣とも相違の異説有之候倭姫世記類の偽書數多流布いたし天神七代地神五代等の年數も被載候説有之皆信用に不足事に御座候神代卷見候久而と有之候事眼目正義に候

一日本紀の内下御靈社の版と有之候神武の卷御所持被成候文字もあるやうにて一覽能本に付大社の版に日本紀全部も有之候否の事可申進候旨被仰下候彼社の版有之候神代上下卷竝神武紀以上三冊御座候日本紀全部は無之候以上

七月二十五日

春滿遺稿の羽倉氏に存するもの自筆二十三種五十餘冊甥信名信章の筆記十一種七十餘冊あり其内全備するもの又闕本あり此に其目を記す神號訓釋傳一訓釋傳類語二日本後紀批考二續日本後記考一三代實錄考六偽類聚三代格考二出雲風土記考一日本姓名錄四國語類聚四古語雜釋一神國音義二語釋草稿七萬葉集問答抄六同僻案抄一同和假名訓五同訓釋一伊勢物語童子問卷物一歌林類聚一春滿遺稿七以上自筆
神代卷割記六古事記割記一三代實錄割記五令義解割記五延喜式祝詞割記一江家次第割記一職原抄割記四名目抄細釋草稿金言卅

葉抄三萬葉集童蒙抄全八十冊の内
存四十二冊百人一首發起傳四以上甥信名信章左滿筆記

此他春滿抄録頭書の書猶多けれど之を略し此に左の二書の一葉を撮影す
神國音義

半紙稿本にして二冊在り缺本なり其撮影せし文左の如し

みはきとかよひて云

かせ 二字上聲 風

かせはかよふけの略之かはかよふの下

略せはけとかよひて云

さり 二字上聲 霧

さりはみつのきの略之きはみとかよ

ひてみつの下略りはきとかよひて云

くも 二字平聲 雲

くもはつちの氣ふりの略也くはつとか
よひてつちの下略もはむとかよひて
氣むりの上下略

一 云くもはくもゐの下略のこは
くもゐはつちのほるきの略くはつ
にかよひてつちの下略もはほどかよ
ひてのほるの上下略ゐはきとかよひ
て云

くもゐ 三字上聲 雲居

くもゐはつちの氣むりの略くはつ
とかよひてつちの下略もゐは氣むり
の上略もはむとかよひゐどりとかよへるこ
くもる 三字上聲 曇

くもるはくもはるの略くもは雲下略

語釋草稿

横帳原稿にて反故裏書あり七冊存せり未完稿なるへし其撮影
せし文左の如し

柯 から 去聲

かしらわたこ

莖 くき 平聲

くさきの ふるちこ

端 はし 上聲

はしめさきこ

橋 はし 上聲

ふみいたわたしこ

箸 はし 平聲

天 あま 上聲

あめそらこ

海人 あま 上聲

うらのともからん

うなはらのともからん

うみはまのともからん

尼 あま 去聲

梵語 女僧之下略

按に當時未だ心を語學に用ゆるものあらず春滿國語に注意せしは興學啓文に臣之至愚何之知所不敢自讓者語釋也云々古語不釋則古義不明古義不明則古學不復とあるを見ても知るへし其毎語平上去の三聲を記せる最も其用意の深きを見るへし惜むらくは其闕本となりしを

賀茂眞淵大人尺牘幅

紀伊郡深草村 羽倉信義氏藏

大人晩年の手筆にして春滿本家の相續者信名に贈りしもの也信名は春滿の姪にて攝津守に任せられたり此書は春滿の歿後其後

嗣に贈りて舊を叙し且其著述及出版の事につき通告依頼せしにて一生學問に盡瘁せしを見るへし

最前は預貴示候處老後繁多諸方一同廢筆談候而及失禮候御容恕可被下候此時梅天濕氣甚候得共彌御安寧被成御座候哉承度奉存候拙下年々衰行候得共心事のみは無別事著述を以て消日候御安念可被下候此度二條御番與力加藤大助と云ふ人上候便前々御無音の罪を贖候のみ恐惶謹言

五月二十日

賀茂眞淵

羽倉攝津守様

尙々御家内様方別而佐仲様へ御傳語申候旨御傳可被下奉願候本書に申候加藤大助とて〇〇一人の一二の間の仁に而和漢ともによほど學事も有之皇朝の古意はよく通達被致候也御社參なから御尋も可申入候ま、無御疎意御話可被下來四月迄逗留候間御近所ならば御出會など被成候而も宜候へ共

二條御城迄貴所より遠所御番衆は數度も城外も成かね候へは左様の事には不及候とも御往還には可然仁に候

二白萬葉卷一二竝別記一卷出判の爲當地御書物師出雲寺和泉丞方へ談候は、彼より京三條高倉東入舛屋町の出雲寺店へ申越候事當正月末にして於今一枚も出來候て下らす候さて待遠有之候尤此度右の加藤大助にも世話致へきのよしに候へともよき御てよりも候は、早く出來候様に御指圖奉頼候此事大西氏へも申遣候

○拙者賀茂姓の事は龜山院文永十一年の宣文候其れは賀茂社家より出て筑前局と申て大内に侍したる女房の知行遠江國敷郡濱松郷岡部村にて五百石賜候事系圖に有之依之先年杉浦圖頭申に付故東萬呂大人加茂社家森飛彈守へ御往還有之御尋候へは新宮の方にて右の宣竝乾元二年の御教書も有之其家に下し給本家に持傳候拙等は庶流にて其頃は漸八九

歳にも可有之よくも不記臆候唯今皇朝の古學を業の如くい
たし候事故加茂家の中へは文通にてもよろし竝著述の一書
にても奉納も仕度事也先祖の崇神故也此事大西氏へも申遣
候乍御勞よりく御通達被成下度候奉頼候賀茂は定かには
不覺候得共新宮とか其節いひし様覺候

○冠辭考の時はいまたしく候而誤多候へは近年兩度に判を
改候所多候也即今は世上へも多く所望にて一年に五十部は
かりつゝは遣候此度萬葉分や、出來候と侍候て右○○○○
○○○此判出來候へは又次々と三四卷爲彫候支度いたし候
自餘得貴意度事共候へとも繁文故に頓首 (○○○は不明)

賀茂眞淵は初め政信又政藤といふ氏は岡部後賀茂眞淵と稱す其
居を縣居と云ふ遠江國敷智郡加茂社祠官の子なり早く國學を好
み上京荷田東麻呂に従ひ其學を究め皇學の泰斗たり江戸に出て
田安宗武に聘せられ後致任専ら述作に従ふ從遊門に滿ち皇學大

に起る識見高邁學問淵博和文の體を完成し歌道を中興せしは皆其力也明和六年十月三日歿年七十三著書多く世に行はる明治十六年特旨を以て正四位を賜り同二十八年更に從三位に進らる
八八 賀茂眞淵大人うゐまなひ跋文章稿幅

京都市 廣田金兵衛氏藏

うゐまなひは大人の著なりしを老後に及び修訂して更に其名を改め再版せし爲めに此跋文を附けしなり

八九

本居宣長翁懷紙幅

京都市 廣田金兵衛氏藏

我を君思ふ心し云々

本居宣長舜齋と號し中衛と稱す後に鈴廼屋と號す伊勢國松坂の人京に出て堀景山に儒を學ひ又醫を某に學ふ國に歸り醫を業とす賀茂眞淵の著書を讀み感ずる所あり刺を投し門人と爲り考究切瑳遂に古典に通達し古事記傳五十卷を著はす世稱して國學の泰斗と爲す其他著書甚多く世に著はる門人業を成すもの頗多し

九〇

本居宣長翁ささしの歌大平筆幅 京都市 廣田金兵衛氏藏

此歌は翁か國體を詠して人に知らしむる爲に作りしもの也大平は翁の子克く家學を繼ぎ國學の大家なり

九一

安藤爲章墨跡

南桑田郡千歲村 安藤新兵衛氏藏

爲章水戸義公に聘せられ大日本史編纂の事に預り楠公淡川碑建設の事を斡旋す此時其父朴翁故郷なる桑田郡千歲村にあり因て手つから楠公碑を寫し父に贈りたるもの也

安藤爲章新助と稱す桑田郡千歲村の人父を朴翁といふ兄爲誠と俱に水戸義公に用ひられ兄は禮儀類典弟は大日本史の編纂に従ふ學和漢に通す著に年山打聞あり世に行はる享保六年十月歿す年五十

愛宕郡上賀茂村

別雷神社藏

今井似閑は京都の人國學を好み契沖阿閑梨を師とし一家を立つ早く國書を別雷神社へ奉納せんと志あり其老に及び此目録を作り自跋を加へて其事を記したるなり此時既に病中と見ね老筆時病中染筆恐難讀解焉とあり其奉納せし書籍は幸に存在して部類三十二書數千六百餘冊あり多くは寫本にて珍書少からず書目のしりへに書く

そのかみやつかれ和朝の六國史を上加茂に奉らんとおもへりされど家のわさしけてむなしく年つきををくりける折にも此書どもを見侍りけるにおほけなきこゝろをもおもひ立けるかなと思へるもいみじきやことに難波東高津圓珠庵といへるいほりにすみ給ひける契沖師といへる沙門にあひて萬葉集をき、侍りけるに日比望みける書をしもおもふまゝにかうかへ

萬葉はいふにおよはす二十一代集六帖三十六人の家集をさへにその外の書はかそふるにいとまあらず又みつからつくり給へる書もおほくあれはこひうけてかきつらぬうつしいとなみやうくいさをしをどけ侍りぬ夫敷島のやまどのふみをつくりはしめけるはそのさき品くあれと今のこれるはわつかに古事記萬葉集なり日本紀はもろくの書をかうかへ給へると見へそれをましへしるし給ひてありのまゝなるへし舊事紀は馬子か君を弑し奉りける心よりなりておほつかなしその外の書は漢家のふみにならひてつくれりしかるに板行せしむる事は世さかりて寛永天正の比よりしきりにおこなはれてそれよりさきは或は人にうつさせ又はみつからうつせるにうみて文字のあやまり落字等おほくて皆人よみどくに物うししかるに契沖師ひとり見およふ所の諸書をかうかへて大よそもどにかへし給へりそれをあらかねのつちほるかどくにしつゝ又私に

もかうかへまたくなせるに似たり此ふみどもを我なからん後にむなしくなさんもほいなくて六國史の外の書とともに上加茂の文庫にたてまつりつさるによりて本のはしめに上嶋奉納今井似閑といへる朱印ををし此目録にそへて奉る物ならしうれたきかなやおほやけの道すたれて國史の内又律令格式の内にも亦缺あり其餘はいふにおよはすねかはくは太神のおほんめくみをたれふたゝひ道のおこらん事を于時享保六年辛丑の七月二十日

老筆時病中染筆

恐難讀解焉

寄附書籍の印は瓢形長二寸一分五厘にして篆字にて上嶋奉納の四字朱文なり

今井似閑奉納書籍の内

上件書目の内此三書を擧ぐ

愛宕郡上賀茂村別雷神社藏

愚問雜記

下河邊長流の筆にて契沖阿開梨の書き入れ本也
萬葉代匠記 全

初め水戸義公下河邊長流に萬葉の註釋を求む未だ成らずして長流亡す更に契沖を聘せんとす應せず爲に萬葉集を註解し之を上る即ち代匠記なり師匠に代るとの意なり此本は契沖の書を似閑の寫したるもの也全部完備せり

契沖阿開梨名は空心夙く眞言に歸し其學を究め顯榮を避け清閑を愛し益々其業を修め内外墳典通せざるはなし最も心を國學に盡す水戸西山公下河邊長流に萬葉の註釋を求め未だ成らずして亡す更に契沖を招かんとす辭して應せず爲に萬葉集代匠記二十卷を選し之を水戸に上る公大に喜ひ白金千兩絹三十卷を以て之を謝す契沖直に之を貧者に施せり後浪華の圓珠庵に居り清貧自から娛しむ著書頗る多し國學の起る實に之を祖とす元祿十四年

正月二十五日寂す年六十二

萬葉緯 全 函入

今井似閑の萬葉集に對し其緯として編述せしものにて古代の詩に關せる書を網羅纂集せり此書は似閑自筆の原本也每卷奉納印あり其表紙每卷別に種々の意匠畫を寫し最も優美なり鑑査狀を附せらる本書の内容は群書一覽に記せり

九四

富士谷成章短冊竝御杖短冊

京都市

廣田金兵衛氏藏

富士谷成章字は仲達北邊と號す皆川淇園の弟也出て、富士谷氏を繼く國學に長し兼て漢學に通し最も和歌を善くし深く心を國語に用ゆあゆひかさし抄等の著あり兄淇園と友愛切至名を齊くす安永六年十月三日歿年四十二坊に葬る子御杖克く家學を繼く同じく此に葬る成章の手稿も其子孫の家傳へたる由なれと遠隔の地なるを以て已を得ず其筆蹟のみを掲ぐ

九五

橘千蔭懷紙幅

愛宕郡大宮村

高見祖厚氏藏

萬葉集略解を徳川幕府に納めし事を喜びて詠せし歌なり略解は其の一生心血を漉きし大著述なればなり

橘千蔭加藤又左衛門と稱し芳宜園と號す江戸の人世々與力たり父枝直と同一真淵の門に入り其高弟たり最も力を萬葉集に盡し萬葉集略解三十卷を著はす先是真淵萬葉考を著はし大に變更する所ありしも千蔭其説に因らず古集に仍りて之に註釋を加へたり幕府命して其書を上らしめ特に銀を賜ひて之を賞す此歌は其時に作りしもの也又書を善くし和様假字に妙にして一家の流を立つ文化五年九月二日歿年七十五

九六

香川景樹懷紙幅

京都市

廣田金兵衛氏藏

稻荷山詣の歌にて世に聞わたる作也

香川景樹初名景徳桂園と號し在焉は其法號なり因幡國鳥取の人若きより歌を好み清水貞固に學ひ若冠京都に出て苦學修練歌道益々進む香川黃中の養子と爲り從六位下に叙し陸奥介に任じ長

門介肥後守と爲り從五位下に進む歌道大に行はれ舊來の陋習を打破し清新の機軸を出す所謂桂園流にて天下を風靡す天保十四年三月二十七日卒す年七十六聞名寺に葬る近年其歌道を振擧せし功を追賞して正五位を贈らる著書世に行はる

九七

平田篤胤懷紙幅

京都市

南大路勇太郎氏藏

むさし野の云々

平田篤胤氣吹廼屋と號す出羽秋田藩士大和氏の子修學の爲め江戸に出て苦學年あり備中松山侯の家臣平田篤穉の養子となり平田篤胤と改む中年賀茂真淵の著書を見て感ずる所あり墓に告げて門人と爲り益々古學を修め別に一機軸を出し大に世に行はる所謂平田流なり著書甚多く門人五百餘人に及ぶ後秋田に召され國學家となる天保十四年壬九月十一日秋田に歿す年六十八近年其功を追賞して正四位を贈らる養子鐵胤克く其業を繼けり

九八

稻生若水寄貝原益軒尺牘幅

京都市

山本復一氏藏

貴札辱致拜見候愈御清福之旨致欣喜候扱歳季之御祝儀唐線香糖霜赤小豆子魚二尾文匣壹被惠下辱幾久目出度致領受候良意方へも糖霜赤小豆被遣候御懇志不淺於拙者辱奉存候早々相達候

一 歸本の儀委曲相心得申候四名公詩集帙新敷申付候春早々出来可申候間指下可申候近來は見事之本は何方にてても歸本に求候に付善本は何の書に不依求る人多御座候いか様唐板の善本を付書院の上などに置き候者他の者々勝れ候様に存申候古筆の歌書などに比較申候得共唐本は何ほど高直と申候ても似申事も無之心安事に存候四名公集は春出来候間指下可申候此外にも唐板の善本に御逢候者御急用に無之書にても一兩部も御求置被成可然存候他の物々身心の上に利益不少存申候
一 吉祥花の佳作兩首被遣拜見珍重存候手前々分ち進候由別て珍重奉存候手前にも有之候者去年火に皆烏有致候此花古人甚愛

賞致候又釋尊說法の時分此草の上に座せられ說法之由見へ候
何様凡艸とは不相見候白き沙の上に植候者別て清潔なる者に
て候此草一名観音草と申候に付拙者母平生觀世音を信し候故
愛植被致候花を開き候年拙者加州に仕官仕候に付彌以此草を
大切に被仕候種にて候間他日寸地を得候者其節少御分ち被下
候様に仕度候間左様に御心得可被下候此間は國方々用事共申
來候宰相殿々御直の御書も賜申候辱奉存事御座候時分柄彼是
取込罷有候間萬期來春可得御答恐惶頓首

極月三十日

稻生若水彰信花押

貝原久兵衛様

稻生若水名は義字は宣義一字は彰信江戸の人京に入り木下順庵
を師とす心を本草學に専らにし博搜考査して庶物類纂一千巻を
著す年僅四十二にして此大著ある古今に稀なり室鳩巢之に序し

て東洋未有の書といふ幕府に獻し賞賜あり此より吾國本草學大
に興れり其他著書甚多く藏書十餘萬卷又萬曆版二十一史に訓點
を施し出版せんとし宋史に及ふ好みて善行を顯し及はさるか如
し正徳五年七月五日京都北小路の邸に歿す年六十一眞如堂の北
迎稱寺に葬る

九九

松岡恕庵張仲景贊幅並小野蘭山肖像幅

京都市

山本復一氏藏

紙本小切四言四句

松岡恕庵名は玄達字は成章恕庵と號す京都の人醫を業とす山崎
闇齋伊藤仁齋の門に入り程朱の學を修め又稻生若水に従ひ本草
學を學ひ其大家たり勤儉書を蓄へ二大庫に充つ延享三年七月十
一日歿す小野蘭山は其高弟なり

小野蘭山名は博職字良文喜助と稱す京都の人若きより學を好み
松岡恕庵に従ひ本草學を學ひ刻苦潛心深く研究する所あり帷を

下して教授す門人甚盛ん也後幕府の醫官に擧られ本草學を講し諸國を巡りて之を實驗し本草學の大家たり我國斯學此に大に起れり柴栗山曰く蘭山の本草李時珍に過くと近時佛國植物博士稱して日本の林娜なりといふ文化七年正月二十七日歿す年八十二著書甚多く皆斯學に益せり

一〇〇 山本亡羊肖像幅

京都市 山本復一氏藏

山本亡羊名は世縞字は仲直京都の人父省香中郎と稱す封山と號す越中の入山本氏を繼く學を好み本佐録を訂刻す柴栗山之か序を作る亡羊若きより學を好み家學を修め又小野蘭山に従ひ本草學を究め斯道の大家たり兼て醫を業とし孜々事に勵み勤儉躬行専ら實踐を力む安政六年十一月二十七日歿年八十二寶塔寺に葬る五子榕室錫夫弦堂秀夫溪山章夫確齋正夫楓庭善夫孝友家學を承け克く樹立す世人伊藤の五藏に比すといふ亡羊著述二十三種皆有用の書也或は印行し其他の家に藏す

一〇一 山本亡羊同居合贊文幅

京都市 山本復一氏藏

亡羊の家を治め産を處する勤儉自立を以て主義とす既に老て男子五人あり榕室錫夫弦堂秀夫溪山章夫確齋正夫楓庭善夫と云ふ初め皆同居し婦を娶りしもの三人榕室の子復一あり於是亡羊は五子一孫七人合作と云ふ印を刻し時々書畫を合作し此印を押して相娛めり亡羊は人たるもの二十歳以上は自立生活の道を講すへし單に修行のみを以て自ら足れりと爲すへからすといふ説を立てたり此に於て同居合贊の説を作り一書を著はし家人に示して之を實行せしめたり錫夫家業を繼ぎ秀夫は教授章夫は畫正夫善夫は曆寫を業とし其得る處は皆父の許に納めしむ亡羊之を冊子に記し歳末に自から計算するを例とせり積む事數年にして各數十金を貯蓄し分家する事となりぬ亡羊は他より養子に望まれしも他姓を繼ぐを不可とし之を肯んせず皆分家自立せしめたり其後錫夫詩を作りて其事を述ふ曰く清福享來未欲奇靈椿樹老桂

枝滋不耕不仕醫爲業、惟儉惟勤、政足施、妯娌無猜、衣互著、弟兄同志、舉俱炊、義方有訓、須相守、永奉家君一紙規、一紙規とは即ち此同居合費の文を云ふなり

一〇二 山本亡羊屠蘇白散圖解幅 京都市 山本復一氏藏

畫は亡羊の子章夫にて亡羊其上に題せしもの

一〇三 山本榕室肖像幅 京都市 山本復一氏藏

山本榕室名は錫夫沈三郎と稱す亡羊の第二子長子天せるを以て家を繼ぎ學を好み業に勵み克く樹立す本草を諸國に搜り益々家聲を擧ぐ發明する所多し當時洛陽三才子の一と稱す年五十六にて歿す其著書十餘種百五六十卷猶家に藏す鴻堂復一は其子也

一〇四 石田梅岩肖像幅 南桑田郡東懸村 石田平藏氏藏

絹本全幅淡彩其子孫の家に相傳せるものにて其帶ふる所の刀も保存せり

石田梅岩名は興長字は勘平梅岩と號す丹波南桑田郡東懸村の人

なり夙く學を好み京都に出て性理の説を聴き又禪を學ひ沈潜考究し遂に平易にして俗に通し易く無學文旨の徒といへども能く行ふへき工夫を發明し講席を開らき何人に拘らず集めて諄々講話す門人大に進み其徒益々盛んなり之を稱して心學といふ風化大に行はれたり延享元年九月二十四日歿す年六十鳥部山に葬る之を心學の開祖と爲す維新前までは京都中に數十の講社ありしといふ今猶存するものあり

一〇五 石田梅岩遺墨幅 南桑田郡東懸村 石田平藏氏藏

紙本君子素其位云々の句を書す尺牘は其子に與へしもの也

一〇六 手島堵庵肖像幅 京都市 柴田寅三郎氏藏

紙本全幅剃髮後の肖像

手島堵庵名は信又喬房字は應元家名を近江屋源右衛門といふ京都三條の市人也隱居して東山に庵を結ひ因て堵庵といふ心學を梅岩に學ひ高弟たり其講席を五樂社といふ家富み施を好み其人

寛厚温良人皆之に懐く心學の弘まりしは此人の力なり天明六年二月九日歿す年六十九鳥部山に葬る心學の著書多し

一〇七 手島堵庵遺墨幅

紙本半切孝弟忠信の四大字

京都市

柴田寅三郎氏藏

一〇八 手島堵庵自畫贊中澤道二忍の字 京都市

柴田寅三郎氏藏

月に芋の畫に自贊あり道二は忍の一大字を書す
中澤道二名は義道家名を龜屋久兵衛といふ京都新町一條に住し
織業を爲せり家貧なれど深く心學を好み宿儒寺僧の談を聴き發
明する所あり手島堵庵につき益々其學を修め師命を以て江戸に
出て心學を開らき又諸國を化導す心學の諸方に弘まりしは大に
力あり享和三年六月十一日歿す年七十九鳥部山に葬る

一〇九 柴田鳩翁肖像自贊幅

紙本鳩翁盲目後講話の畫上に盲目後の自贊あり

京都市

柴田寅三郎氏藏

柴田鳩翁名は享字は陽方謙藏と稱し剃髮して鳩翁と改む京都の

人夙く心學を好み其道に力を盡す諸侯招聘して其人民の化導せしもの多し中年明を失ひしも爲に屈せず天保十年五月三日歿す年五十七鳥部山に葬る其講話を集めて鳩翁道話といふ廣く世に行はる其孫は柴田寅三郎なり

一一〇 小田原侯大久保忠貞書幅

絹本半切草書二行物

京都市

廣田金兵衛氏藏

大久保忠貞は加賀守と稱す小田原侯忠顯の子天明元年江戸に生れ十六封を襲き大阪城代京都所司代を經文政元年老中となる年三十八勤恪學を好み政務に通す初め白川樂翁公に服事し後首座老中たる久し川路聖謨矢部定謙間宮林藏二宮尊徳を擢用す時の良輔と稱す天保八年三月卒す年五十七

一一一 二宮尊徳翁肖像幅

絹本大幅社祢帶刀端座の像なり

京都市

岡田良平氏藏

二宮尊徳翁は通稱金次郎相摸國足柄上郡柏山村に生る父を利右

衛門と云ふ農を業とす尊徳困貧中に刻苦勉學自ら克く樹立し報徳主義を發明し簡易直裁近切行易く躬行實踐能く事業を擧ぐ其主大久保忠貞に登用せられ功業益々擧かる門人頗盛んなり安政三年十月二十日歿す明治以後に至り其道益々行はる

一一二 一宮氏二世手翰合裝幅

靜岡縣

中上喜三郎氏藏

尊徳翁及其子尊行其孫尊信三世手翰を合裝せしもの也報徳主義は此三世を以て成立せしものなりといふ

一一三 二宮尊徳翁幼時勉學圖幅

京都市

湯淺吉郎氏藏

大畫箋全幅水墨山水畫中に一樵童觀書の圖にて谷口藹山の筆也此圖は京醫郷健重郎二宮翁を尊信し其教を弘めんと欲し思ふに名手に托し其畫を作り事由を題し之を名山に寄附し以て衆人に看せしめんには若かすと因て藹山に囑し其畫を作り湯本文彦に囑し其文を代作し之を鹿苑寺に納めしか更に一幅を自家にも藏せんとて再たひ此畫を作らしめし也郷氏亡後轉展して湯淺氏の

藏となれり京都にて二宮翁の畫を作りしは森本復淵を始めとす其畫は今奈良帝室博物館に在りといふ

一一四 安居院翁肖像幅

京都市

岡田良平氏藏

安居院翁は舊と遠州某寺の住なりしか克く報徳主義を信し其道に入り還俗して處々に講話し最初に遠州地方に其道を弘めし人なりといふ

一一五 不退堂遺墨

京都市

留岡幸助氏藏

不退堂は藤原聖純といふ京都の人にて夙に尊徳翁を師とし其學を修む是は不退堂か自から翁の報徳訓を書せしものなり不退堂の傳は考査中なり

一一六 絹屋佐平次丹後縮緬紀念碑

丹後國

中郡役所出品

佐平次は峰山の人にて其地の貧寒を濟さん爲め辛苦して縮緬等を始め終に地方の大物産となれり關西聯合共進會にて追賞を行はれし時地方同志者か建碑紀功せんとて山田府知事に願出て

明治三十一年に建設せしもの也

一一七 辻慶儀歌幅

京都市

辻忠郎兵衛氏藏

辻慶儀は京都巨豪辻家の元祖にて勤儉勵精其家を興したり其老後教訓いろはうた養生めの子算仁術歎心抄四徳配當抄の四書を著はし其家範と爲し歴世遊奉家道益々榮わたり山本亡羊の門に入り儒學を聴き専ら徳義を重んじ一家の風紀を立てたり此歌は晩年書して子孫に貽したるもの也

一一八

仙洞御田植畫幅

神戸市

田中勝之丞氏藏

仙洞御庭の東北に舊と水田あり年々田植の式あり愛宕郡松ヶ崎の村民參庭して田植を行ひ仙洞にも御棧敷を設けて觀覽ありし古式なり王代には耕田の式ありしも久しく廢せしか此式は恰も其舊事に則とるもの、如し一年和歌山藩士密に拜觀して歸りて藩主に語しに藩主は大に感して其畫員廣隆に命し式に據りて畫かしめしものなりといふ此時挿女の歌ふ田植歌又賜物等あり其

のこと其村志に記したり其謠に曰く

花の都の八重さくら花はいろく多けれど、あいこの花に二首の歌よんでつけたる其こすね、文もと、かす顔も見す、それさへいまは、其花も、やかたをいて、ひらくそや(下略)

一一九

熊谷直孝紀恩碑

京都市

熊谷直之氏藏

熊谷直孝通稱久兵衛京都の人所謂鳩居堂なり父直恭といふ世其業を傳へ深く心を公益に用ゆ直孝遺業を繼ぎ維新變革に當り志士と交通し闘る所あり明治の初め屢々獻金し國帑を助け種痘を開き小學を始め市制を整へ功勞甚多し明治八年二月三日歿す年五十九京都府其功に對し金若干を賜ひ府教育會其小學創立の功を以て三組銀盃を贈り三十六年十一月十三日特旨從五位を追贈せらる此碑は其子直行其恩榮を紀せんために其墓に建つるもの也直孝古香と號し風流文雅書畫を善くせり

一二〇

西郷南洲先生私學校揭示卷物

京都市

西郷菊次郎氏藏

南洲先生故山歸臥の後私學校を設くるや自から書して其揭示と爲したるもの、案なり本書は兵火に焼け是のみ其家に傳へたり

明治四十一年十二月十五日印刷
明治四十一年十二月二十日發行

編輯者 報德講演會

代表者 湯本文彦

發行兼印刷者 合名會社 芸艸堂
代表者 山田直三郎

印刷所 株式会社 金子印刷所
神戸市兵庫淡町二丁目二十六番地

不許複製

發行所 美術書肆 芸艸堂合名會社

京都市上京區寺町二條南

長電二百九十番
振替貯金四貳九七

246
2
86

